狂言

昭和50年1月1日発行
発行所
名古屋市中区橘一丁目7−5
井上重兵衛方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
日東印刷工業株式会社　電(481) 7445

狂言人語

あけましておめでとうございます。本紙も昭和三十一年十二月の創刊以来十九年目の春を迎えました。さゝやかながら皆様のお手許にお届けしつゝ積み重ねた年月をふりかえり、今さらなを経て績み重ねたものの重みが、やがて何らかの存在価値を生み出してくれるものと期待しつゝ、今年も性懲りなくお届けするものです。

新春、昭和五十年の狂言会の初頭を飾って、四年目を迎えた「名古屋狂言小劇場」が別掲の如く第九回公演を行がら感無量の想いがいたします。

さて、本紙第百六十三号で御紹介しました「能仁新報」の所在が、野村広二氏の御教示を得て、後述の通り判明いたしました。明治期の十年間、名古屋を中心とした能楽活動のあり様をうかがうことのできる貴重な資料といえましょう。本紙「狂言」もこの間何度も発行の意義を問い直したり、時には発行困難に陥ったりもしましたが、何とかこれまで継続して参りました。さゝやかなものですが継続していることと自体、意義あることと思います。時います。どうかご期待下さい。

昭和五十年に当地で開催予定の狂言会をご案内申し上げます。

一月二十三日（木）於・名演会館
名古屋狂言小劇場　（有料）
三月十六日（日）
大蔵流狂言会　（無料）
五月下旬頃　於・名演会館
名古屋狂言小劇場　（有料）
六月十四日（土）
也留舞会　（無料）
六月二十二日（日）
和泉流狂言大会　（無料）

謹賀新年
昭和五十年元旦
狂言共同社

七月六日（日）
朝日狂言会　（有料）
十月十八日（土）
野村又三郎舞台生活五十年記念狂言会　（有料）
十一月二十三日（日）
和泉会　（有料）

一月の催能

一月七日
学生能と狂言の会
能　田村　若尾正士　亀井熱　西村欽也
間　佐藤友彦
能　胡蝶　角田陽子　滝昌子　半田龍男
間　横山高十
能　国栖　渡辺隆男　加藤龍二　竹川克巳
間　光岡修　森崎寿郎
能　紅葉狩　石井要子　井辺洋子　高安滋郎
間　松井直子　五味美恵子
狂　膏薬煉　内海勇夫　山口隆夫
狂　舟ふな　河田公明　大岩英二

一月十五日
能　班女　清韻会
間　小島トミル　西村欽也　佐藤秀雄　井上礼之助
能　藤戸　長谷川実　高安滋郎
間　佐藤卯三郎
狂　餅酒　佐藤友彦　大野弘之　井上松次郎

一月十九日
呉竹会

一月廿三日
大声会　於　名演小劇場
狂　文相撲　井上松次郎　大野弘之　佐藤友彦
狂　酢薑　佐藤卯三郎　井上礼之助
鶏聟　佐藤融　佐藤秀雄　鷺見政行　佐藤友彦

一月廿六日
能　弱法師　和島富太郎　西村欽也
間　佐藤友彦
能　杜若　泉嘉夫　高安滋郎
狂　伯母ケ酒　野村又三郎　井上礼之助

名古屋狂言小劇場

第九回〈喜びの詩〉
（日時）昭和五十年一月二十三日（木）午后六時半開演
（会場）名演会館（東新町中電ビル東）

文相撲　井上松次郎　大野弘之　佐藤友彦
酢薑　佐藤卯三郎　井上礼之助
鶏聟　佐藤融　佐藤秀雄　鷺見政行　井上礼之助　井上松次郎　大野弘之　佐藤友彦
地謡

（入場料・六〇〇円）

名古屋大声会
狂言共同社

狂言解説

餅酒＝毎年元日に上頭へ酒を捧げる加賀の国の百姓と、餅を棒げる越前の百姓が道連れとなり、首尾よくこれを納め、御前で出された難題にも無事応え万雑公事をゆるされて、それぞれの国に帰るというものです

文相撲＝下人を一人しか抱えぬ大名。もう一人抱えんと、太郎冠者を求人に遣し、新参者を抱えました。得意な芸を問うと相撲とのこと相撲は見たし相手はなし、やむなく大名自身新参者と取り組み散々負けてしまいます太郎と二人秘策を練り、再度新参者に排戦しますが——。

酢薑＝和泉の国の酢売と、津の国の薑売が行商の途中に出会い、互に商売

司を争って口論となります。それ〳〵の系図も甲乙つけ難く、結局各々の商売物によそえて秀句争いが始ります。酢売の「す」の文字と、薑売の「から」を織り込んだ言語遊戯です。

（薑は、はじかみ＝しょうがのこと）

鶏聟＝聟入りの日に式作法を知らぬため、聟は知人の所へ式作法を尋ねに来ました。知人が後の笑い草になる様にと、とんでもない作法を教えてやります。さあ、喜び勇んだ聟は舅の方へ行き、座敷へ通るといきなり「コカァ」と鶏の鳴真似を始めます。舅も太郎もびっくり驚天――。

伯母ケ酒＝酒屋に伯母を持つ男、何とか酒を振舞わせようとあの手この手を使うのですが、しわい伯母は遂に首をたてに振りません。一計を案じた男鬼になりすまして伯母を威し、無理矢理酒を呑んでその場に寝込んでしまいます――。

狂言万声

野村広二

新年おめでとうございます。まず五十年の能界が多幸でありますよう、みな様とともに祈りたいと思います。

四十年も話題の多い年でした。宝生流家元継承披露能、老女物、祝賀・追善・記念能と狂言会、芸術院新会員と人間国宝指定、叙勲、受賞、書籍の発行、海外狂言講座、海外能ほか。演能ではすぐれた舞台の印象が永遠に残る部分を私の心に刻みつける佳さを興えてくれた、そういう能や狂言をみる仕合せを持ったことは言うまでもない。次に能・狂言に寄せる健筆にあわせて古典芸能に幅広く盡されてきた北岸佑吉氏の叙勲に心からお祝いを述べたい。また毎日芸術賞は桜間道雄氏、芸術選奨・文部大臣賞はワキ方宝生弥一氏、古典芸能の研究にますます没頭される本田安次氏と大河内俊輝氏が受けられた。本田氏とは随分と以前岐阜県・能郷の能の永久保存用の収録（NHK）で能郷を訪ねたとき、北岸氏や横道万里雄氏の別組で来られ、親しく温顔に接した。保存会の方々がたづねることにやさしく答えられていた。「翁」のことであった。近か頃はテレビの古典芸能講座で時折お目にかかるが、あのときの辱知はいつまでも忘れられない。狂言ではじめに大阪・朝日狂言会が二十周年を迎えられたことを祝いたい。野村万蔵氏が芸術院会員になられる。朗報。茂山千作・野村万蔵・三宅藤九郎の三長老は今年も健在で東奔西走の活躍。その万蔵氏は喜寿の祝賀狂言会、新著・夏に技・冬に声、芸術院入りとめでたいことが三つも続く。因みに円熟味いよいよ深まる舞台の千作氏には本年八十の賀を祝う狂言会が催されると聞く。藤九郎氏の、新作集の本も出版されるという。楽しみである。そして芸術祭優秀賞が二年連続で野村万之丞・万作両氏と、茂山忠三郎氏に決定。忠三郎氏の受賞は関西のために喜ばしい。またラジオ部門では「峯入り行者」（NHKFM、飯沢匡作茂山千五郎・忠三郎ほか、狂言風）も優秀賞に選ばれた。本も作年は狂言関係の好資料を能の大著好著にまじってたびたび手にした。狂言総覧（和泉流能楽書林）につづいて狂言集成（〃）狂言史研究（小林責、わんや書店）狂言（保育社カラーブックス三〇二）日本芸能史論考（虎明とわらんべ草、松田修、法大出版局）春のてまり（狂言のこと、佳篇、福原麟太郎、三月書房、再版）に万蔵氏の前述の書物など。それから万作氏のハワイ狂言講座の紀行文（能楽タイムズ六月号）に大層感銘を受けた。文中「太郎冠者あるか――／はあ／いたか／お前に／念のう『早かった』を英語でやるところは何度も読み返えす。心なごむ。同・七月号のハワイの学生諸君が先生の万作氏に贈ったスケッチ集もおもしろい。テレビ（NHK）の狂言放送は五番。夷毘沙門（千作）若菜・見物左エ門（万蔵）無布施経（藤九郎）磁石（弥太郎）、能の方は九番ほど。わが家で狂言や能をみる楽しみは大きい。失敗談を一つ。それは現代謡曲全集（丸岡明編ソノシート、筑摩書房）の在庫目録がこれまた同紙七月号に載った。先代千作現千作・万蔵・藤九郎諸氏の狂言と小舞謡。申込を遅らせて八月号の在庫目録をみれば、何と渇望のソノシートははずされているではないか。取り返えしのつかない事をしたと苦い思いがいつまでも消えなかった。おくれましたが、ここで作年他界されました方々、十一月末なくなられた能画家仙田雪山子氏のこともあわせてご瞑福をお祈りしたい。

名古屋の四十九年を顧みると、昨年も漸進的な桂さを固守すると同時に、三役の行往坐臥これ稽古と心得る若手の抬頭が目ざましかったことを特記し東西で三役の後進養成が急務となっている昨今現有勢力であるその前進に、今年も明るい希望を寄せたい。来名のシテ方も若手の青年楽師（梅若万紀夫・金剛流松野恭憲ほか）諸君が新しい花の美しい舞台をみせたし、観世清和君の千歳も初々しくてよかった。そして元正・喜之両氏がつとめた各三番の舞台は名古屋においても観世流の盛んな現況を象徴するかのようであった。他方、学生能・婦人能・薪能・大衆能・義援金能など昨年も盛会であったことは言うまでもない。そして藤田六郎兵衛氏が中日文化賞受賞。狂言は朝日狂言会・名古屋和泉会・やるまい会に三年目を迎えた名古屋狂言小劇場も充実。千作・藤九郎・東次郎三氏の来名こそなかったけれども、万蔵氏はじめ東西の狂言師の好演技は見所に狂言の笑いを味得させた。三番叟（保之）水汲・無布施経（万蔵、いづれもアド万之介）空碗・半蔀の間狂言（シテ大槻秀夫、立花供養）祭化（千五郎）金藤左エ門（忠三郎）居杭・蝸牛（万之丞）萩大名（万作）は楽しく、とりわけ無布施経は秀逸。大蔵流なごや会（大蔵弥太郎）も河村丘造八十才祝賀狂言会もにぎやかであった。名古屋勢は釣狐（又）、八十を越して元気な卯三郎氏の宗論・木六駄が注目を浴びたし、奈須語（友、初演）小謡鳴子（又・松）も耳をそばだてさせた。上京中の祐一氏の太郎冠者（名古屋和泉会）ほかの

舞台は気迫に充ち、福の神（松）鈍太郎（保之）のアドを勤めた友彦・弘之両氏とともにその将来はいよいよ開けて来たと言えよう。共同社の上演数は五十五番前後、下半期ではほかに伯養（松・秀・卯）鐘の音（礼・松）伯母ケ酒（松・秀）など。愛知県新城の能・狂言、岐阜県能郷の能、三重県鈴鹿市・一宮椿大神社の伊勢古能・鈿女〈うずめ〉の金剛流復曲奉納（本年再上演、伝統芸能四八・八、能楽タイムズ四九・六関連、渡会恵介）伊勢の奉納能が盛大におこなわれたことを書き添えたい。

さて、狂言四九・九月号の能仁新報所在について、二・三当っていましたが、昨年十一月名古屋市鶴舞図書館の参考資料室（太田恭嗣職員）で調べていただいた結果、東大法学部明治新聞雑誌文庫に保存されていることを教えられた。明治二三・五・一二から同三三・六・二五まで（一号―六四九号）発行、発行所は名古屋の能仁社、文庫内所属番号はS―二五／N―一三／三―四（上・中・下の三段）であることを共同社に早速伝えて、その後のことを頼んだ。後報が待たれる。

昨年末のテレビ放送（NHK）は教養特集・日本の楽器・笛（横道万里雄・藤田大五郎ほか）記録映画世阿弥（白洲正子構成・鹿島映画社制作）市民大学講座・敗者の文学・修羅とものの（島津忠夫・馬場あき子・中村保雄、司会渥美かおる）。本は古能（後藤淑・萩原秀三郎共著、河出書房、丸善豪華本展示会、第一頁の毛越寺の若女の舞の写真に圧倒される）田楽の芸風と観阿弥・世阿弥（石黒吉次郎、国語と国文学四九・一一）幻花（東京連載小説、瀬戸内晴美、三一―三八、世阿弥のこと）東西文化比較研究・日本美は可能か・美意識と倫理（日本文化会議編、研究社、能・世阿弥関連）観たもの聴いたもの（村上元三、朝日十二月初旬、万蔵の木六駄・舟弁慶のアイを教わった万之丞の稽古振り）など。六月から十一月までの未掲載の本（九冊）は割愛したい。

今年も格調高く、寒暖の味をただよわせ、美しく、気迫に充ち、楽しく、そしておもしろい能や狂言をできるだけみたいものです。大きな期待をもってこの新しい一年を迎えましょう。

名古屋博物館舞台被き能組について（そのⅡ）

先に本紙第百六十三号にて御紹介した標記の能番組について、その後の調査と、各方面からお寄せいただいた情報、資料により、不明であった部分で明らかになりつゝあるものもございますので、ここにあらためて御紹介させていただきます。色々と御教示、資料等をお寄せ下された方々にはあらためて厚く御礼申し上げます。

共同社　同人

〈能組〉

本催しの能組は「名古屋市史・風俗編」にも見えている。これによると、初日・六月十日、二日目は予定の十一日が雨天で順延となり、二日目は六月十二日、三日目・六月十三日と催されたこととなっている。「能仁新報」の記録と「名古屋市史」との間には、以下の如き異動が見られる。

（能仁新報）		（名古屋市史）
初日		
草紙洗小町		
（大鼓）	西　東平	（同）吉田方条
望月		
（シテ）	喜多六平太	（同）寺田左門治
（ゴム印ニテ（寺田左門治ニ訂正）		
二日目		
翁	（太夫）喜多六平太	（同）（なし）
（ゴム印ニテ寺田左門治ニ訂正）		
鞍馬天狗		
（シテ）	喜多六平太	（同）寺田左門治
（ゴム印ニテ寺田左門治ニ訂正）		
（大鼓）	吉田方条	（同）西　東平
三日目		
翁	（太夫）木村治一	（なし）
石橋		
（シテツレ？）	観世清廉	（同）柴田穀彦
（シテ？）	柴田穀彦	（同）片山九郎三郎
船弁慶		
（シテ）	喜多六平太	（同）喜多六平太
（ゴム印ニテ寺田左門治ニ訂正）		
（大鼓）	西　東平	（同）立花一枝

「能仁新報」の記事が予告番組であるのに対し、「名古屋市史」の方では事後の記事として取り扱っているという性格の相異はあるが両者間の異動を比較した場合、果して「名古屋市史」の方が正確に訂正したものであるかどうか疑問な点もある。（二日目の翁太夫の記載がないが、千歳を狂言方が演じているので、下懸りでなければならない）ともあれ、演者等の異動についてはこれ以上現段階では言及出来ぬものがあり、御紹介にとゞめる。

〈能仁新報〉

野村広二氏の御教示により、東京大学法学部明治期新聞資料センターに本紙が保存されていることが判明し、早速御照会させていただいた。それによると次の様な概要である。

（創刊）明治二十三年五月十二日。
（編集人）石川福松（後には笠間久三郎に交代）
（印刷兼発行人）中村元亮。
（発行所）「能仁社」
名古屋市旭町五六番戸

この新聞は明治二十三年、週刊紙として発刊。縦三十四センチ、横二十五センチ、八面からなり、毎月曜日発行されたもの。何号頃まで継続刊行されたかわ不明であるが前記東大資料センターには、創刊号より明治三十六年六月二十五日、第六四九号まで保存されている。

〈藤井六三郎〉

三重県中尾栄一氏からの御教示によれば、藤井六三郎は本名を中尾平兵衛と云い、栄一氏の祖父にあたる人だとのことである。又三郎家の弟子ではなかったらしく、同家には井上菊次郎（初代）、伊勢門水に師事したという記録があるとのこと。明治三十四年に没している。

＜古沢廓之助＞

前西芳雄氏からの御教示によれば、京都での同人の活躍がうかゞわれる。明治七年西本願寺の日数能に「すはじかみ」を勤めており、明治六、七年頃には茂山千五郎、尾崎正作、今〇参次郎とわりに多く組んで居る。その外、村田八十八（後東上）、井狩辰吉、茂山〇三、三宅庄市、同惣三郎らとも同勤している。明治十五年九月の孝明天皇奉納狂言にも出勤しており、前西氏は茂山千五郎家の弟子であったろうと推測せられている。

豊太閤三百年祭記念東西合同能でも（明治三十一年四月）に京都方より出演、茂山千五郎の三番三に千歳でその相手を勤めている。やはり千五郎家の弟子であろうと思われるが、たゞしこの博物館舞台被き能には、名古屋の狂言師か、もしくは当地にゆかりの深い山脇元清、野村又三郎の来演を数え、大蔵流の狂言師が他に見られないこと。さらに同勤の藤井六三郎迄が前述のごとく菊次郎、門水の弟子であることなど、まだ疑問な点が残るものである。

＜加藤半外＞

片野東四郎氏によればこの人は故林源蔵氏の師であったということである。従って宝生流ではなく、観世流。なお詳細は不明である。

＜追補＞

明治期の名古屋能楽界は明治二十七年のこの博物館内能楽舞台が開設される以前は、本格的な舞台はなく、楽師個々の邸内の舞台で、それでもかなりの演能が催されていた様である。主な会場には次の様なものがあった。

木下舞台（上園町一丁目　木下敬賢）
早川舞台（比米町　早川幸八）
大野舞台（広井井桁町　大野藤五郎）
古春舞台（上園町　古春増五郎）

この他、若宮八幡社、東照宮、その他神社、寺院に特設舞台を設けることも多く、明治二十年一月には能楽舞台開設前の博物館内でも演能が行われている。博物館の舞台被き以後、那古野神社にも明治三十三年四月に能舞台が設けられ、三十年代の催しの多くは殆どこのいずれかで行われている。そして四十年代に入ると明治四十二年十月に東区呉服町に本格的な能楽堂（能楽倶楽部）が開設され、これ以降、昭和六年に布池町に能楽堂が移るまで、演能活動の中心となったものである。

能楽協会名古屋支部よりおしらせ

旧冬十二月一日に催しました歳末助け合い義捐能は左記の通り義捐金をそれぞれ県、市へ、寄託致しました。各位の御協力を感謝致します。

愛知県　拾六萬弐千七百廿円
名古屋市　拾六萬弐千七百廿円

二月の予告

二月　二日　宝生会
能　芦刈　内藤泰二　西村欽也
間　佐藤友彦
能　百萬　辰巳孝　高安滋郎
間　井上松次郎
狂　鬼瓦　佐藤卯三郎　井上礼之助

二月九日　観世会
能　老松　観世喜之　西村欽也
間　佐藤秀雄
能　東北　観世元正　岡次郎右衛門
間　井上松次郎
能　野守　観世元昭　高安滋郎
間　佐藤友彦
能　節分　野村又三郎　井上礼之助

二月十六日　梅猶会
能　清経　熊沢恵美子　高安勝久
能　揚貴妃　梅若盛義　高安滋郎
間　佐藤秀雄
能　熊坂　梅若修一　西村欽也
間　大野弘之
狂　佐渡狐　野村又三郎　井上礼之助　井上松次郎

二月廿弐日　梅若実追善能
能　野宮　梅若六郎　高安滋郎
間　佐藤秀雄
能　安達原　梅若景英　西村欽也
間　井上礼之助
狂　宗論　野村又三郎　井上松次郎　佐藤卯三郎

二月廿三日　青陽会
能　巻絹　河村鉦二　西村欽也
間　井上松次郎
能　羽衣　生駒美代子　高安勝久
間　藤戸　塚本秀雄　高安滋郎
間　佐藤友彦
狂　素袍落　佐藤秀雄　井上礼之助　佐藤卯三郎

賀正
ふごや
河文
電話代表(23)一三八一番
トヨダビル店
大名古屋ビル店
栄スカイル店
くせな
船津屋
電話栄名代表(22)八一八〇番

昭和50年2月1日発行
発行所
名古屋市中区橘一丁目7—5
井上宜兵衛方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
日東印刷工業株式会社　電(481) 7445

狂言人語

暖かい春を思わせる様な日が数日続いたかと思うと、そのあとにはきまって厳しい寒波が待ち受けております。まだ〳〵春には遠いようです。お身体には充分お気をつけ下さい。

さて、先に本紙上でその所在をご紹介しました「能仁新報」について、去る一月中旬に東京大学法学部「明治新聞雑誌文庫を訪ずれ、閲覧する機会を得ました。十年間の紙面は九冊に製本され、結局半分ほどしか目を通すことは出来ませんでした。「能仁」の語は釈迦牟尼の「能仁寂黙」からとったもので、仏教関係の新聞として仏教会関連記事が大半を占めておりましたが、それでも明治期を伝える貴重な資料として、興味ある記録、記事をいくつか拾うことが出来ました。いずれ機会を選んで本紙にご紹介させていたゞく所存でおります。

「和泉流猿楽狂言記念碑」の再発見について

佐藤友彦

明治十七年に建立されたこの石碑は笹野堅氏の「狂言の発生と発展」（能楽全書・巻五）で全文が紹介され名古屋西本願寺別院にあったことが記されているが、社中の古老からもその様に聞き伝えていた。しかしながら戦后永くその行方がわからず不明となっていたものである。昭和十七年名古屋市教育会発行の「金石文集」にこの碑文を見出したが、それによれば「昭和区広路町八事山興正寺」とあり、これをたよりに広い境内を捜し廻った結果、庫裏と鐘楼に続く石段に狭まれた斜面に前に倒れて裏面だけを見せ、半分土に埋もれて眠っているこの石碑を再び発見したものである。その後、これを起こすとともに整備をして、今では誰の目にも触れられる様になっている。附近へお立寄りの節には御一見いただきたい。

この碑が建立される直接の契機となったのは、碑文に記されている通り、明治十七年三月に催された「追善狂言会」であった。八代目山脇和泉元賀（明治九年没）、九代山脇得平（弟子家、明治十一年没）、四代目早川幸八（明治十年没）と維新以後相次いで没した三師追善のため、弟子達が力を併せて催したものであり、二日間にわたり能六番、狂言十四番を揃えた狂言会は当時画期的なものであった。

初日（三月九日）

玉の井　木下敬資　西村大蔵
唐人相撲　田中庄太郎
猿座頭　山本久平
無布施経　三橋正太郎
鎌腹　井上菊次郎（初代）
蝉丸　古春左衛門　大河内助太郎
狸腹鼓　角淵新太郎
棒縛　磯部三段治
六人僧　田中全三郎
舎利寺　田中左門治　味岡福蔵

後日（三月十六日）

俊寛　古春左衛門　大河内助太郎
飄神　田中全三郎
木六駄　山本久平
子盗人　角淵新太郎
仁王　田中庄太郎
葵上　木下敬資　加藤十郎
釣狐　井上菊次郎
苞山伏　磯部三段治
業平餅　伊勢門水
融　寺田左門治　西村大蔵

こうして追善会を成功させた後日、六月に「記念碑」が建立される運びとなり、それはまた後年（明二十四年六月）共同社結成への確かな足がかりとなったものである。（続）

二月の催能

二月　二日　宝生会

能　芦刈　内藤泰二　西村欽也
間　佐藤友彦
能　百萬　辰巳孝　高安滋郎
間　井上松次郎
狂　鬼瓦　佐藤卯三郎　井上礼之助

二月　九日　観世会

能　老松　観世喜之　西村欽也
間　佐藤秀雄
能　東北　観世元正　岡次郎右衛門
間　井上松次郎
能　野守　観世元昭　高安滋郎
間　佐藤友彦
能　節分　野村又三郎　井上礼之助

二月十六日　梅猶会

能　清経　熊沢恵美子　高安勝久
能　揚貴妃　梅若盛義　高安滋郎
間　佐藤秀雄
能　熊坂　梅若修一　西村欽也
間　大野弘之
狂　佐渡狐　野村又三郎　井上礼之助　井上松次郎

二月廿弐日　梅若実追善能

能　野宮　梅若六郎　高安滋郎
間　佐藤秀雄
能　安達原　梅若景英　西村欽也
間　井上礼之助
狂　宗論　野村又三郎　井上松次郎　佐藤卯三郎

二月廿三日　青陽会

能　巻絹　河村鉦二　西村欽也
間　井上松次郎
能　羽衣　生駒美代子　高安勝久
能　藤戸　塚本秀雄　高安滋郎
間　佐藤友彦
狂　素袍落　佐藤秀雄　井上礼之助　佐藤卯三郎

狂言解説

鬼瓦＝遥か遠国の大名。永の在京でしたが、訴訟に勝って晴れて帰国することとなり、国幡堂へお礼参りに出かけました。冠者と二人でお堂をながめていた大名が突然泣き出しました。大名が指さす先には鬼瓦が……。

節分＝節分の夜、はる〳〵蓬来の島から日本に渡った鬼が、女一人で留守居をする家に入り込みました。いかつい鬼が女に心を奪われ、隠れ蓑、隠れ笠を与えるのですが結局「鬼は外」と豆で追い払われてしまいます。

佐渡狐＝上頭へ年貢を納めに上京する途中一緒になった佐渡と越後の百姓ふとした話のはずみから佐渡に狐が居るか居ないかの口論となり、各々の腰の物を賭けました。実は佐渡には狐は居ないのですが、佐渡の百姓は判定を頼んだお奏者にわいろを贈り……。

宗論＝善光寺帰りの浄土僧と、身延帰りの法華僧が道連れとなりました。互いに自身の宗旨のありがたさを説き相手を帰依させようと、同宿となった部屋では奇妙な宗論が始まります。

素袍落＝急に伊勢参宮を思い立った主、太郎冠者を伯父のもとへ誘いにやります。しかし今日云って明日のこと伯父は行けぬとて、太郎冠者に素袍を与え、酒を振舞って帰します。ほろ酔い加減の冠者が御機嫌での帰路、様子を見に来た主に出逢いました……。

狂言団子

野村広二

太平無事の正月三が日であった。放送で能（謡曲）や狂言、雅楽や江戸の邦楽番組をみたりきいたりすること例年のとおり。ラジオ五流謡曲（NHK以下おなじ）の「翁」は金春流。テレビ能は観（金春信高）と大江山（喜多実）、狂言は三本柱（千作）釣針（藤九郎）、ラジオの狂言は八幡前（忠一郎）鐘の音（万蔵）小謡・福の神（弥太郎）。この小謡をまじえた二日の独吟・一調の放送もすばらしい。藤九郎氏からおくられた卯年の小舞謡・玉兎をくり返えし声を上げて読む。「玉兎／かがやく中の杵の音／つきあがりたる鏡餅／そり餅しては飛び跳ねて／天上界へ供え餅／神も納受と聞き耳の／長き寿命ぞ／めでたき／長き寿命ぞめでたき」である。二日三・四の本に向うのも例年どおり、まず『わらんべ草』（大蔵虎明、第六段、岩波文庫）の「翁有時、こしらえて、幕きはへかかり、太夫御面に神酒を上る〳〵三ばうにかはらけさかずき、あらいよね、かわらけに入、錫に酒入進て、太夫いただき、三番さうにさす、三番さう、千歳にさす〳〵それより囃子衆、次第に呑、云々」次は香西精氏の「能謡新講」（芸の伝承―観・世・雅の三代）そして谷川徹三先生の「芸術の運命」から「日本の芸術についての一視点」の結びの部分、美と非美・芸術と非芸術の微妙な別れを。机上にはまだ二・三の本が置かれて閑かである。演能は七日の学生能と狂言の会はじめ盛会が続く。第九回を迎えた名古屋狂言少劇場（大声会）は三番の狂言で、佐藤融君（六才）の聟の姿（鶏聟）が初々しく、おもわず笑いを誘う。「聟じやといえ」のことばがなかなかうまい。観能旅行は京都室町金剛会へ。よく晴れた日曜日の室町通りはしづかである。シテ（金剛永謹）ののびのびとしてやわらかい線と全体の運びのよい絵馬・美しい羽衣（巌）にたんのうする。

さて昨年末（十二月二十三日）他界された国文学の高木市之助博士は名古屋和泉会の発起人のお一人でした。この「狂言」百号記念特集号（四二・九月）には「故桜山壮次君と狂言」の一文を寄せられ、博士の親友と狂言に深愛の眼をそそがれましたが、前年・四十一年の中世文学会の「私にとって中世文学的なもの」で説かれた中世文学の観阿弥的と世阿弥的傾向のお話も忘れることができないし、熱田で新作能・女と影上演のとき語られた講演の「新作もいつかは古典になるような新作でありたい」の言葉も美しくまたきびしく伝わってきた。「観世」（四二・五月号、講座・杜若特集）に「伊勢物語と杜若」の調子の高い含蓄に富んだ文章も寄せられている。見所でも楽屋でも端然としてしかも和やかなあのお姿は何とも美しかった。今は雲の上の人。ご著書の前に黙然とする。

（続）

放送（テレビ）は狂言三代（万蔵）教師・狂言七十年（狂言と若い人と稽古、万蔵）同・世阿弥の世界（戸井田道三）教養特集・上村松園（序の舞ほか、阿北倫明・上村松篁ほか）女性手帳・世阿弥のことば（二回、観世寿夫）市民大学講座・平家物語の世界・頼政謀反（水原一・里井陸郎）など。本は学鑑（四九・十一月号表紙、細川家伝来能装束・黒紅地御簾紅葉文唐織）大法輪（二月、特集・仏教と芸能、五来重・戸井田道三・味方建ほか。付記、一月死去された能狂言愛好者坂東三津五郎氏の「虚仮・是真」の一文を含む）など。

三月の予告

三月二日 九皐会
- 能 清経 野垣慶子 高安滋郎
- 能 花月 鈴木胡蝶 高安滋郎
- 間 佐藤友彦
- 能 葛城 橋本とも 西村欽也
- 間 大野弘之
- 狂 歌争 井上松次郎 井上礼之助

三月九日 橋岡会追善能
- 能 合甫 橋岡佐喜男 高安勝久
- 間 井上礼之助 佐藤秀雄
- 能 大原御幸 橋岡久馬 高安滋郎
- 間 佐藤卯三郎
- 能 天鼓 鈴木一雄 西村欽也
- 間 橋岡久春
- 井上松次郎

三月十五日 青少年芸術劇場
- 狂 悪太郎 井上松次郎 佐藤友彦 大野弘之

三月十五日 青少年芸術劇場
- 能 土蜘 内藤泰二 高安滋郎
- 間 佐藤友彦
- 狂 附子 野村又三郎 井上礼之助 大野弘之

三月十六日 大蔵流狂言会
- 能 東北 池田菊雄 西村欽也
- 間 佐藤秀雄
- 能 猩々 武田小兵衛 西村欽也
- 狂 夷大黒 井上松次郎 井上礼之助 佐藤卯三郎

三月廿三日 淡交会追善能
- 能 忠度 伊藤長八 高安勝久
- 間 佐藤秀雄
- 能 隅田川 瀬戸操子 西村欽也
- 狂 不腹立 佐藤卯三郎 井上松次郎 井上礼之助

三月廿一日 武田躯楽会

狂言

昭和50年3月1日発行
発行所
名古屋市中区橘一丁目7-5
井上武兵衛方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
日東印刷工業株式会社　電(481) 7445

狂言人語

寒さもゆるぎ、おだやかな日が続きます。春、三月の声をきくと、冷たい風さえも春の香りがするようです。

扨、今月の能も盛会が予想されるものです。ことに十五日には市内の小・中学生の子供達を対象とした初めての試み「青少年芸術劇場」の一環として能、狂言の公演がもたれます。狂言を活字による学校の教育だけですますことなく、生きた教材として、舞台芸術として子供達の眼に触れさせる機会を今後も多く作って行きたいものです。

十六日にはこれも着実に名古屋の地に根をおろした「大蔵流狂言会」の発表会が開催されます。会員達の日頃の修練の発表の場として大いにその成果が期待されます。

三月の予告

三月二日　九皐会

能　清経　野垣　慶子　高安　滋郎
能　花月　鈴木　胡蝶　高安　滋郎
間　佐藤　友彦
能　葛城　橋本　とも　西村　欽也
間　大野　弘之

狂　歌　争　井上松次郎　井上礼之助

三月九日　橋岡会追善能

能　合甫　橋岡佐喜男　高安　勝久
間　井上礼之助　佐藤秀雄
能　大原御幸　橋岡　久馬　高安　滋郎
間　佐藤卯三郎
能　天鼓　鈴木　一雄　橋岡　久春　西村　欽也
間　井上松次郎

狂　悪太郎　井上松次郎　佐藤　友彦　大野　弘之

三月十五日　青少年芸術劇場

能　土蜘　内藤　泰二　高安　滋郎
間　佐藤　友彦
狂　附子　野村又三郎　井上礼之助　大野　弘之

三月十六日　大蔵流狂言会

三月廿一日　武田謡楽会

能　東北　池田　菊雄　西村　欽也
間　佐藤　秀雄
能　猩々　武田小兵衛　西村　欽也
狂　夷大黒　井上松次郎　井上礼之助　佐藤卯三郎

三月廿三日　淡交会追善能

能　忠度　伊藤　長八　高安　勝久
間　佐藤　秀雄
能　隅田川　瀬戸　操子　西村　欽也
狂　不腹立　佐藤卯三郎　井上松次郎　井上礼之助

狂言解説

歌争＝春の野に野遊びに出かけた二人、とんちんかんな歌を詠んでは互に相手を笑物にし、遂には口論がエスカレートして、お決りの相撲となってしまいます……。

悪太郎＝日頃乱暴者の悪太郎。今日も伯父の家で散々に呑み、酔って路上に寝込んでしまいます。様子を見に来た伯父は、悪太郎の頭を坊主にし、自慢の髭を剃り、僧体に仕立て、枕元で今日からの名を〻なむあみだぶつ〻と名告くと告げて去ります。目覚めてみると、今夢に付けられたばかりの名を呼ぶ者があります……。

附子＝大事の砂糖を食べられまいと主人は二人の冠者に毒だと偽って外出します。ところが怖い物見たさの二人は怖々附子のふたをあけ、附子の正体を見破り、これを全部食べてしまいます。この云い訳には……。

夷大黒＝比叡山三面の大黒と西の宮の夷（えびす）とに祈誓をかけ、御霊夢を授けられた男、お告げの通り帰って勧請する所へ、夷、大黒二神が現れ各々の威徳を語った上、数々の宝を与えてその家に納まります。

不腹立＝食いつめた上で出家になりすました俄坊主。運よく堂守を求める二人連れに声をかけられ、望む所と同道します。ところが名を尋ねられてでたらめに「腹立てずの正直坊」と答えたため、二人から散々にからかわれて化けの皮をはがされてしまいます。

狂言団子

野村広二

二月は梅、三月は桃そして桜、といってもわが家のどれもまだ三月はじめには蕾は固い。二月の寒さはきびしかったが、中旬にはうぐいすがやってきた。春の兆が心をなごませる。

今年は祝賀能にもまして追善能の数が多い。二月の名古屋は観世能五回に宝生能一回。観世能は観世会（初回）梅猶会と二世梅若実十七回忌追善能ほか。名古屋が最初で催される追善能に梅若六郎氏は野宮・合掌留、景英氏が安達原・黒頭を手向ける。野宮は絶品であった。六郎氏にお目にかかって、ご尊父逝去の前後には華雪・山口直知両氏もなくなられた由承る。秋には関寺小町を舞われること、ラジオ放送（NHK）で六郎氏の関寺をお聴きしたこと、かって水道橋で故桜間弓川氏の同曲拝見のことなどにも觸れた。その前後の日には雪が降ったが、当日は晴れて鈍い日射しの午後の楽屋で物静かに話される笑顔にきざまれた能芸の深く美しい年輪が心を澄ませるひとときであった。その頃六郎氏の関寺のインタビュー（きき手・渡会恵介氏）が載る伝統芸能二月号（京都伝統芸能懇話会、同氏）をいただいた。狂言は宗論（又・松・卯）。深くやわらかい味わいでしみじみと見せた。二月の又三郎氏はこのほか節分（又・礼、観世会）佐渡狐（又・礼・松、梅猶会）を演じたが、宗論が出色。因みに佐渡狐は、一月金剛会で千作氏（奏者）が演じた

ときは、狐の姿かたちを言い当てる二人の百姓の位置が次のよう、自付柱からワキ柱へ、佐渡・越後の百姓・奏者と鈍角三角形に並び今度は越後・佐渡・奏者と鋭角三角形に近くすわって、三者のやりとりがかわされる。どちらもおもしろかった。

ここで前号に続き故高木市之助博士のことを。先生はご気分のよい木曜日には主治医のM医師を訪ねられたが、それから付添いの奥様と大好きな東鮓（あづまずし本店）へ廻られるのが楽しみのご様子だった。四十八年晩春私もお世話になるM医師（大の狂言愛好者で、また幽玄夫人というすばらしい随筆がある）をお訪ねした木曜日のかえり、途中まで先生お二人のお伴をして、伊豆旅行でみられた椿の花の美しさ、放送万葉集（NHK）あのご放送には鬼気迫る佳さを感じたが、二つのお話を拝聴して楽しかった。また円空暦を、岐阜県関市・制作者（写真）の後藤英夫氏から毎年いただき、先生にはM教授にお願いしてお屈けしていた。今年卯年が最後の制作だったが昨年末（直送）お目にふれられたかどうかさて先生に三・四の謡曲（能）・狂言についてご高見を伺えないままお別れした名残り惜しさが、日を経るに従って、雲のように大きく広がっていく。

放送は鶴亀・曲入（宝生英雄）一調・山姥（近藤乾三・柿本豊次）市民大学講座・平家物語・木曽最後（巴御前のこと、水原一）をみ、鞍馬天狗（観世静夫、いづれもNHK）をきく。本は特集能の舞台（前西芳雄ほか、京都・一月号末見）道成寺のさまざま（国立劇場二月中旬、朝日一・八）軒端の梅（東北と和泉式部、安住敦、学鐙一月、丸善）羽衣（馬場あき子、幽玄の世界十四、淡交二月）八島（同十五、同三月）トロイアの女（劇の重層構造と能・狂言、谷川徹三、朝日・日記から、一・六―十七、十回）など。

「和泉流猿楽」狂言記念碑（2）

佐藤友彦

こゝでこの碑文の全文を書きくだし文にしてご紹介する。（原文は漢文）

技芸の宗師は之を家元と謂ひ、又師家と称し、其弟子の師准を得て、人に教ふる者も亦た師家と称す。山脇和泉は猿楽狂言の家元なり。其弟子の師家と称するもの、曰く早川幸八、曰く山脇得平、共に旧尾張藩役者たり。山脇和泉は禄百石、其余差有り。皇政維新藩を廃し県を置かるゝや、三家共に士族の籍に編入せられ、其家芸に於ても亦必ずしも継ぐことを須めず。家元八世の孫山脇和泉元賀明治九年十有一月十五日を以て没す。法号は善道寄。嗣山脇和泉元清家芸を継ぎて東京に移住す。早川幸八明治十年九月二日没す。法号は泰翁。一女有り男無し。山脇得平則継明治十一年三月廿四日没す。法号は徳厳寿仙。男山脇隆録商を業として家芸に従事せず。是に於て浪越狂言の統絶ゆ。弟子角淵宣・井上菊治郎之れを惜み、有志数人と相謀り、明治十有七年三月九日及三月十六日筵を設けて猿楽し、三師追遠会を修す。角淵宣は狸腹鼓を演じ、井上菊治郎は釣狐を演ず。皆其芸に於て貴重するところなりと云ふ。既にして角淵・井上等議して曰く、往昔始祖山脇和泉元宣始めて藩祖源敬公に仕へ、尾張は和泉流狂言根元の地なり。今や遺沢寥々として地に墜ちんとす。是の如くにして識らざれば後或は将に攷ふ可き無からんとすと。角淵宣は嘗て余に学ぶ。書を贈りて余に之れを誌さんことを請ふ。乃ち筆を援り聞ける所を書し、之に係くるに銘を以てす。曰く、

狂言の狂は勤戒これに寓す。
教にあらざる靡し、
孰か其の然るに寔はん。
乃ち其家に名つく山脇和泉と。
源は江より出ず、岳楽の軒。
茲に貞石に刊して以て其伝を永にす

牧山、佐藤楚材選。
受業生、福岡欽崇書。

（裏面）

角淵　宣　三橋正太郎
井上菊治郎　井上光太郎
田中庄太郎　山本　鋲輔
山本　政守　菱田　鐸造
磯部三段二　稲葉　権一
河村鍵三郎　稲葉千万吉
伊勢　門水　浅井　鉞夫
田中全三郎　浅井　恵

この碑文を撰した佐藤牧山は、享和元年（一八〇一）愛知県中島郡山崎村に生れ、丹羽村の鷲津松隠の有隣舎、名古屋の河村乾堂の塾等に学び、後に江戸へ出て昌平黌に入った。その後尾張藩の儒官となり、また明倫堂の督学となったが、明治四年の廃藩置県により明倫堂も廃止され、牧山は大津町に塾を開いた。こゝに多くの塾生が集り、遅れて来た者は戸外に立って聴講した程という。碑文にある通り、角淵宣もこの頃の塾生として学んだものであろう。在名の学徒で牧山の教えを受けぬ者はないとまで云われ、門人からは浅野醒堂、服部悔庵、石川素堂、等が輩出した。牧山の名は全国に知れわたり文部省は特に硯と「六国史」とを贈って長年の教育の労を賞している。明治二十四年二月九十一才で没。

四月の催能

四月　六日　竜吟会　囃子会

四月十三日　観世会

能　半部　梅若万三郎　西村　欽也
間　佐藤　友彦
能　鞍馬天狗　藤井　久雄　高安　滋郎
間　井上松次郎　大野　弘之
狂　花盗人　佐藤　秀雄　井上礼之助

四月廿七日　大槻清韻会

能　巻絹　殿島　修二　高安　滋郎
間　佐藤卯三郎
能　頼政　泉　嘉夫　西村　欽也
間　佐藤　友彦
能　船弁慶　大槻　文蔵　高安　滋郎
間　大野　弘之
狂　咲嘩　井上松次郎　佐藤友彦　井上礼之助

四月廿九日　幸友会　囃子会

狂言

昭和50年4月1日発行
発行所
名古屋市中区橘一丁目7−5
井上重兵衛方 電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
日東印刷工業株式会社 電(481)7445

狂言人語

桜の季節、熱田能楽殿の周囲の桜も近年、めっきり見事な花をつける様になりました。散りかゝる花吹雪を身に浴びながら能楽殿の門をくゞるのも、毎年の決った喜びの一つとなっております。楽しみにおでかけ下さい。

さて、狂言を手軽に楽しんでいただける様にと三年前に発足しました「名古屋狂言小劇場」が此度第十回を迎えることとなりました。これを記念して別掲の番組予告のごとく、二日間にわたって三番ずつ計六番の公演を行うことになりました。和泉流宗家和泉保之師の来演も予定されており、楽しいポピュラーな名曲を揃えた手軽な狂言会としてお贈りします。どうかよろしくお願いします。

「狂言太夫山脇和泉家流伝統之碑」の所在について

この碑は七代目山脇和泉元業が天保年間に建立したもので、和泉流の流祖岳楽軒から始まり、同流の系譜を簡明に記し、もって同家の権威を広く世に伝えたものである。戦前に名古屋市東区教順寺に在ったが、その後境内から姿を消し、当寺に問合せても不明とされていた。

三月の御彼岸には型の如くお墓参りに行った。名古屋の墓地の多くは戦後一ケ所に集められ、市内の東、平和公園と呼ばれる丘陵地に、宗派、寺院ごとに整理されて墓の一大団地を形成している。先祖の墓参をすませて、ふと教順寺の墓地を尋ねる気になった。教順寺自体がわからないとのことから、これまで墓地を捜すこともしなかったのだが、実際に尋ねて見て驚いた。頭からないと思い込んでいたこの碑が、元業の墓と並んで目の前に在ったのである。あるべき所にちゃんと在ったのである。これまで捜そうともしなかったことをあらためて反省するとともにこゝにご報告する次第である。

なおこの碑についてはすでに昨年小林責氏がその所在をつきとめられていたことを後日知り、今さらながら自分の怠慢さを思い知らされている。

佐藤友彦

（碑文の全文については「狂言集成」に影写されていたが、複刻版では解説と共にカットされている。「能楽全書・巻五」に全文あり）

写真左・伝統之碑、右・元業之墓

四月の催能

四月　六日　滝吟会　囃子会

四月十三日　観世会

能　半部　梅若万三郎　西村欽也
間　佐藤友彦
能　鞍馬天狗　藤井久雄　高安滋郎
間　井上松次郎　大野弘之
狂　花盗人　佐藤秀雄　井上礼之助

四月廿七日　大槻清韻会

能　巻絹　殿島修二　高安滋郎
間　佐藤卯二郎
能　頼政　泉嘉夫　西村欽也
間　佐藤友彦
能　船弁慶　大槻文蔵　高安滋郎
間　大野弘之
狂　咲嘩　井上松次郎　佐藤友彦　井上礼之助

四月廿九日　幸友会　囃子会

狂言解説

花盗人＝ふと出来心で桜の枝を一枝盗んだ男。小人の所望で再び盗みに入った所を、待ち構えていた家人にまんまと捕えられ、桜の木に縛りつけられてしまいました。そこで盗人にも三分の利、すっかり感じ入った花主は盗人のいましめを解き、酒盛が始まります

咲嘩＝連歌の当番に当った主人。宗匠に頼むため、太郎冠者に都の伯父を呼びにやりました。ところが伯父を見知らぬ太郎冠者が、連れて来た男を見れば、こともあろうに見請咲嘩と呼ばれ恐れられている大盗人です。事を荒立てての後難を怖れて、主人は太郎冠者に適当にあしらって帰すようにと云いつけたのですが……。

狂言団子

野村広一

春の彼岸の中日（三月二十一日）にテレビ能・天鼓（梅若六郎）とラジオで回想の名人集（左近・初代巌・兼資・弓川・六平太・新ほか、話・白洲正子・宝生弥一・増田正造、ともにNHK、以下おなじ）が放送された。月日のたつのは早いもので、数々の思い出だけがなつかしく残る。三月は、故橋岡久太郎氏の十三回忌追善能が催された。九日は名古屋橋岡会（橋岡久馬）二十三日は名古屋淡交会（橋岡久共）で。橋岡さんの少し背をまるめて、いつもにこにこされていた温容が忘れられない。名古屋の熊野・卒都婆小町、通小町、朝日五流能、テレビ能・張良ほか語るべきことは多い。かって贈られた「橋岡久太郎偲ぶ草」（昭四二）

をひもとく。久馬氏はこれより先きに東京で鸚鵡小町を手向けたが、名古屋の「御幸」は佳篇。「きようもむなしく」のふんい気のよさ、「六道のちまたに」「一門西海の波に」「なりはつる」のあたりは太小の波のうねりのように平家物語の哀感が伝わり、「竜顔に」でうづくまる姿も美しかった。それにシテの語ることばの微妙さが万物流転・人生無常の心に食い入ってきた。

狂言は悪太郎（松・友・卯）、おもしろし。十六日は大蔵流狂言などや会（大蔵弥太郎）。第五回を迎え和を以てますます狂言に精進のあとを見せる。毎回わざの上達を発表するとともに狂言芸の心を練り、格調の正しさを追い求める舞台の各姿には敬服のほかない。大蔵氏と奈良春日さんの能・狂言の行事の新旧思い出話をかわす。そして今年二十回を迎えた中日五流能は三十日。巻絹・イロエ（宝生英雄）と「縄ない」（千作）をみ、期待の一調一管・芭蕉（謡金剛巌。笛杉市太郎・小鼓曽和博朗）しかきけなかったが、巻絹は切りと留めの姿が強く印象に残る。先日傘の祝日の

名古屋狂言小劇場

第十回記念公演

於名演会館

五月二十三日（金）　午后六時半始

入間川　佐藤友彦　鷺見政行
空腕　野村又三郎　佐藤秀雄
犬山伏　井上松次郎
井上礼之助　大野弘之
佐藤卯三郎　佐藤友彦

五月二十四日（土）　午后六時半始

黒塗　大野弘之　佐藤友彦
棒縛　和泉保之　佐藤秀雄
悪太郎　佐藤卯三郎　井上松次郎
井上礼之助
佐藤秀雄
井上松次郎

入場券・前売各八〇〇円（当日一、〇〇〇円）
前売券は市内各プレイガイドにてお求め下さい。

狂言会を催されたばかりの千作翁は元気な舞台。一調一管は長袴で巌氏を先頭に笛・小鼓と揚幕からしづしづと登場し、演奏し、今度は巌氏を最後に切戸口へさがる、その間約十五分、能芸の粋の披瀝（ひれき）に没入する。観能旅行は二十三日京都室町へ。初代金剛巌二十五回忌追善能。初代他界後二十五年の歳月を経たが、その間の金剛能への伝統継承の蓄積が大きな充実と高い安定となってあらわれた。実にすばらしい追善能。感動の一日であった。くわしくは別記。

四十九年度の芸術院賞は喜多実氏に。能に造詣の深い那須辰造氏他界。同氏の随筆「DEMON」（能一巻十号昭二二・一〇、能楽協会）は愛読久しい。

放送は市民大学講座・平家物語の世界・寂光院（大原御幸・六道、水原一・富倉徳次郎、終回）黒川能（題名のない音楽会、舞台浄め・岩船、下座、話増田正造・黛敏郎、名古屋テレビ）をみる。本は「誰にでもわかる能のみかた」（権藤芳一、京都東洋文化社、佳書、寄贈）傘の祝（茂山千作翁のと、瀬戸内寂聴、遠い風近い風47、朝日三・八）能道成寺（白洲正子、十一面観音巡礼・能野詣、芸術新潮四月）ほか。

五月の予告

五月　三日　観世流流友大会
五月　五日　巽会
能　敦盛　足立尚子　高安滋郎
間　大野弘之
能　杜若　平井ミヨ　西村欽也
狂　清水　井上礼之助　佐藤卯三郎
五月　十日　九皐会
能　放下僧　観世喜之　高安滋郎
間　井上松次郎
囃　蟬丸　小島芳雄　高安滋郎
間　佐藤卯三郎
能　葛城　高木美智子　西村欽也
間　井上礼之助
狂　文山賊　佐藤友彦　大野弘之
五月十一日　邦謡会
五月十八日　猶飄会
能　安達原　杉田合子　高安滋郎
間　井上松次郎
五月廿三日　大声会
五月廿四日　大声会
五月廿四日　一謡会
能　邯鄲　高安滋郎
間　井上松次郎
五月廿五日　観衛会
能　杜若　加藤歌子　西村欽也
能　実盛　山崎栄治　高安滋郎
間　佐藤友彦
狂　魚説法　井上松次郎　大野弘之

酒　味　噌
た　ま　り　商
食　料　品
むとう食品店
名古屋市昭和区川名本町1の10
電話　(762)　2166番

昭和50年5月1日発行
発行所
名古屋市中区橘一丁目7−5
井上直兵衛方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
日東印刷工業株式会社　電(481)7445

狂言人語

なたね梅雨――しとしとと降り続く雨に、時としてうんざりしますが、この時期の雨にうたれた緑の若葉の美しさはまた格別のものがあります。そしてこのしっとり濡れた緑の木立ちの中に、ゆるやかな円型の姿を横たえてたたずむ能楽殿は、すっかり調和のとれた存在として神宮の森と溶け合い、今では神宮の森になくてはならぬものとなっております。この熱田神宮能楽殿も、昭和三十年に竣工されてから今年で二十年を迎えます。これを記念してこの八月二十四日には、二十周年記念能が盛大に催されます。在名楽師が中心となり各流楽師総出演のこの会にどうかご期待下さい。

さて、能楽堂を離れて、都心の小ホールに狂言を定着させようと企画して来たのが「名古屋狂言小劇場」です。これも今回は第十回を迎え、五月二十三、二十四の二日間にわたり狂言六番を揃えた記念公演を開催します。狂言の会が続きます。六月十四日には「也留舞会」で、野村又三郎師社中の狂言発表会が、また二十二日に新城狂言同好会、玉石会、大声会らの合同で「和泉流狂言大会」がそれぞれ日頃の成果を発表する予定です。どうか御声援下さい。

そして七月六日は第十七回を数える「朝日狂言会」です。別掲番組の如く、大蔵流茂山千五郎、千之亟、千作の三師を迎え、和泉流宗家保之師他地元狂言師総出演のこの会に、今回は佐藤秀雄孫(友彦長男)、佐藤融が靱猿の小猿役で初舞台を勤めます。どうかご期待下さい。

明るい話題を一つ、名古屋狂言界最長老佐藤卯三郎、ベテラン井上礼之助佐藤秀雄の三名が、宝生流シテ方内藤泰二師と共に、今回日本能楽会々員に選ばれました。(重要無形文化財綜合保持者)今後一層の活躍が期待されましょう。

五月の催能

五月　三日　観世流流友大会

五月　五日　巽　会

能　敦盛　足立　尚子　高安　滋郎
間　大野　弘之
能　杜若　平井　ミヨ　西村　欽也
狂　清水　井上礼之助　佐藤卯三郎

五月　十日　九皐会

能　放下僧　観世　喜之　高安　滋郎
間　井上松次郎
能　蟬丸　小島　芳雄　高安　滋郎
間　佐藤卯三郎
能　葛城　高木美智子　西村　欽也
間　井上礼之助
狂　文山賊　佐藤　友彦　大野　弘之

五月十一日　邦謡会

五月十八日　猶諷会

能　安達原　杉田　合子　高安　滋郎
間　井上松次郎

五月廿三日　名古屋狂言小劇場
五月廿四日

五月二十三日（金）午后六時半始

狂　入間川　佐藤　友彦　鷺見　政行
狂　空腕　野村又三郎　佐藤　秀雄
狂　犬山伏　井上礼之助　大野　弘之
佐藤卯三郎　佐藤　友彦

五月二十四日（土）午后六時半始

狂　墨塗　大野　弘之　佐藤　友彦
狂　棒縛　和泉　保之　佐藤　秀雄
狂　悪太郎　佐藤卯三郎　井上松次郎
井上礼之助

五月廿四日　一謡会

能　邯鄲　澄川　幸子　高安　滋郎
間　井上松次郎

五月廿五日　観衛会

能　杜若　加藤　歌子　西村　欽也
能　実盛　山崎　栄治　高安　滋郎
間　佐藤　友彦
狂　魚説法　井上松次郎　大野　弘之

狂言解説

清水＝野中の清水でお茶の水を汲んで来る様云い付けられた冠者。行きたくないため、桶をかくして鬼が出て逃げ帰ったと偽りの報告をします。ところが主人は桶の惜しさから清水へ様子を見に出かけました。窮余の一策、太郎冠者は自身が鬼に化けて主人を威すことにしました……。

魚説法＝住持の留守に説法を頼まれた新発意。お布施につられてつい引受けたものの。お経の一つも知りません自分が海辺育ちで魚の名を多く覚えていることを幸い、魚の名ばかりを連ねたなまぐさ説法を始めます。

狂言団子

野村広二

冒頭風かおる季節、英国エリザベス女王ご夫妻が万緑の日本へおいでになった。能や狂言の一こまがご覧に入れる伝統芸能のなかに予定されているだろうと胸をふくらませたが、新聞やテレビの報道を見守っていて、私の知る限りでは、あの日本的な能の美しさと狂言の笑いをお見せした光景に接しなかった。しかし宮中晩さん会のとき、それに先き立ち、招待された方々のごあいさつをお受けになったのが石橋の間。お立ちになっている後の壁の画は前田青邨氏描く喜多六平太氏の石橋の獅子の姿で、獅子と英国とはゆかりが深い。それと京都西本願寺を見て廻わ

られるうちに、南能舞台へお目を注がれたテレビの一こまがあった。

舞台は森閑として静寂そのものがあったが、一瞬、そこで、西王母・羽衣（舞込の切りのあたり）・石橋のような曲が舞われて歓迎申し上げているかのような明るい幻想に駆られた。狂言だったら何がよろしいであろう。蹴まり舞楽・箏曲・カブキ（狐火ほか）に操り人形の八重垣姫の可愛らしい姿などはご覧になっていただいた模様である。なお、十一日のテレビ（NHK、以下おなじ）で来日中の英国ロイヤルバレー団が演じたバレー・リーズの結婚はすばらしかった。後半リーズ家の居間の場のタンバリンの踊りの前後は特に狂言と相通ずる格調高い笑いがあった。この場の最後（終了）までがよき狂言になると思った。

さて、五月一日の熱田神宮舞楽神事に出かける。能楽殿と関係の深い権宮司長谷晴男氏は本年は散手（さんじゆ）を舞われる。鉾を持って舞台にあがってからしばらくの動きと紅（あか）い装束の姿が特に明るく印象に残る。また四月十六日は東照宮の例祭。今年の舞楽は桜吹雪に肩を白くして、羽塚堅子翁の採桑老を去年の秋につづき拝見。曲中天を仰ぐ姿が美しかった。あわせて平曲の話題を一つ。平曲の伝承者井野川孝治氏（名古屋・七一才・検校）が春の叙勲で勲四等瑞宝章を受けられる。以前熱田の見所で舞台に端然と向う同氏の姿をみかけたが、大層立派であった。あれは名匠鑑賞能（故田鍋惣太郎主催）であったと思う。四月の狂言は花盗人（秀・礼）で佐藤秀雄氏が近来にない秀逸の味わいをみせたし、咲嘩（松・友・卯）の力演も見事。そして今度日本能楽会新会員に佐藤卯三郎・佐藤秀雄・井上礼之助の三氏が内藤泰二氏（宝生流）とともになられることに祝意を表したい。また「能楽の友」が四月号で百号を迎えたことにも放送は熊野（元正）・求塚（後藤得三）私の散歩道・京都御苑（湯川秀樹・ゲスト茂山千作、狂言の話ほか）をみる。本は党員の捉・ブレヒトの谷行翻案（平川祐弘季刊芸術三三号、講談社）現代における「私」（佐伯彰一・秋山駿、世阿弥関連、群像四月、同社）英国気質是非（桜井錠二博士と謡曲の英訳関連、戸川秋骨、〈英語研究〉の七十年、論文復刻、〈昭一三〉三一巻一号、研究社）英語英文学に就いて（外国での日本文学、花伝書関連、吉田健一、筑摩書房）能狂言面（金子良運編、日本の美術一〇八、至文堂、未見）ほか。

第十七回 朝日狂言会

於 熱田神宮能楽殿

七月六日(日) 午後二時

大名 太郎冠者 佐藤卯三郎 佐藤友彦
猿引 佐藤秀雄 猿 佐藤融
素囃子 笛 藤田六郎兵衛
神 小鼓 福井啓次郎
舞 大鼓 寛一 鉱一
太鼓 助川 竜夫
瓜盗人 盗人 茂山千之丞 畠主 茂山千五郎
——休憩——
蝉 蝉ノ精 和泉保之 旅僧 井上松次郎
素袍落 太郎冠者 茂山千五郎 所ノ者 大野弘之
主 茂山千之丞
伯父 茂山千作
祢宜山伏 山伏 井上礼之助 祢宜 野村又三郎 茶屋 井上祐一 大黒 今枝靖雄

閉会午后五時頃

会費・指定席一、五〇〇円普通席一、〇〇〇円階上席八〇〇円
各出演楽師宅 各プレイガイド

六月の予告

六月一日 青陽会
能 竹生島 加賀敏彦 高安勝久
間 佐藤友彦
能 熊野 柴田牧武 高安滋郎
能 鉄輪 大槻文蔵 西村欽也
間 大野弘之
狂 不見不聞 佐藤卯三郎 井上礼之助 井上松次郎

六月五日 熱田祭協賛能
能 猩々 百々康治 西村欽也
能 小袖曽我 生駒美代子 前野郁子
間 野村又三郎
遊 土蜘 鈴木義久 高安勝久
間 大野弘之
狂 芥川 井上礼之助 佐藤秀雄

六月八日 幸謡会 於岡崎随念寺
能 班女 近藤幸江 高安滋郎
間 井上松次郎 井上礼之助

六月十四日 也留舞会

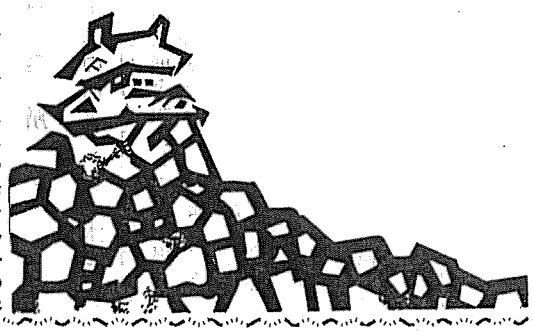
六月十五日 宝生会
能 大原御幸 宝生英雄 高安滋郎
間 井上礼之助

六月十一日 中部金剛会
能 羽衣 倉本雅 高安勝久
狂 空腕 井上松次郎 佐藤友彦

六月廿一日 夜討曽我
能 杜若 吉川周子 高安滋郎
間 豊島三千春 佐藤友彦
狂 竹ノ子 井上礼之助 井上松次郎

六月廿二日 和泉狂言会 佐藤卯三郎

六月廿九日 鳳鳴会
能 善知鳥 山本一 高安滋郎
間 大野弘之


城
割烹・小料理
熱田能楽殿内喫茶部
・住吉小路（中区栄3-10）
電話241-0248
・喫茶とグリル 労働文化センター内
電話731-1128

昭和50年6月1日発行
発行所
名古屋市中区橋一丁目7−5
井上直兵衛方　電(321) 1480
名古屋狂言共同社
印刷所
日東印刷工業株式会社　電(481) 7445

狂言人語

うっとおしい梅雨の候、降り続く雨にうんざりしている間は、夏のうだる様な暑さを忘れて、夏の青空と焼けつく陽光が待ちかれるこの頃です。

毎年盛夏の頃になると、きまってこの世界では催能も夏休みに入るものでしたが、近年は能楽殿にも冷房が完備され、催能が数多く開かれる様になりました。六月の「也留舞会」「和泉流狂言大会」に続いて、七月六日は待望の「朝日狂言会」です。にぎやかな「靱猿」に始まり、大蔵流茂山兄弟による「瓜盗人」「素袍落」さらに和泉宗家による「蝉」そして「犬山伏」と変化に富んだ曲目を揃えました。特に仕舞狂言「蝉」は、昭和二年当時呉服町の能楽堂で河村丘造先代鍵三郎が丘造野崎達二を相手に勤めて以来、名古屋では実に五〇年近く上演の記録はないもので、大いに期待されるものでしょう。

別掲の如く八月二十四日には、能楽殿二十周年記念能が開催されます。在名楽師総力を挙げてのこの催し、どうかご期待下さい。

暑中御見舞

昭和五十年盛夏

狂言共同社

さて、夏休みになりますが、名演小劇場では「夏休みこども劇場」として毎年人形劇、子供映画、コンサートなどを開催していますが、これに「狂言」が今年度加わりました。八月三日（日）に、別掲予告の如く、子供達にもわかりやすい楽しい曲を択んで開催されます。昨年度から始まった「青少年芸術劇場」とともに、子供達に本当の古典のおもしろさを知ってもらうためにも、こうした企画がどん〳〵取り上げられて欲しいものです。どうかお子様とともにお出かけ下さい。

六月の催能

六月一日　青陽会
能　竹生島　加賀　敏彦　高安　勝久
間　佐藤　友彦

能　熊野　柴田　牧武　高安　滋郎
能　鉄輪　大槻　文蔵　西村　欽也
間　大野　弘之

狂　不見不聞　佐藤卯三郎　井上礼之助　井上松次郎

六月五日　熱田祭協賛能
能　猩々　百々　康治　西村　欽也
能　小袖曽我　生駒美代子　前野　郁子
間　野村又三郎

狂　土蜘　鈴木　義久　高安　勝久
間　大野　弘之

狂　芥川　井上礼之助　佐藤　秀雄

六月八日　幸謡会　於岡崎随念寺
能　班女　近藤　幸江　高安　滋郎
間　井上松次郎　井上礼之助

六月十四日　也留舞会

六月十五日　宝生会
能　大原御幸　宝生　英雄　高安　滋郎
間　井上礼之助

能　羽衣　倉本　雅　高安　勝久
狂　空腕　井上松次郎　佐藤　友彦

六月廿一日　中部金剛会
能　杜若　吉川　周子　高安　滋郎
能　夜討曽我　豊島三千春
間　佐藤　友彦

狂　竹ノ子　井上礼之助　井上松次郎　佐藤卯三郎

六月廿二日　和泉狂言会

六月廿九日　鳳鳴会
能　善知鳥　山本　一　高安　滋郎
間　大野　弘之

狂言解説

不見不聞＝耳の遠い太郎冠者では留守が心配だと、主人は座頭の菊市を頼みました。菊市が物音を聞きつけて太郎冠者のひざを叩く、それを合図に太郎冠者が見廻る、こう手筈を整えて二人は留守居に当りますが……。

芥川＝西の宮へ参詣に出かけた足の不自由な男と道連れとなりました。互いに自分の不自由な面をかくしての道中ですが、津の国の芥川にやって来ました……。

空腕＝臆病者の癖として空腕立てを云う冠者を試そうと主人は夜道を使いに出しました。後から様子を見に出かけると、案の定、太郎冠者は相手も居ない海道に座り込み、太刀を差し出して命乞いをしています……。

竹ノ子＝今年始めて自分の畠に竹ノ子が顔を出しました。ところが隣の藪の藪主が、自分の所の竹が根をさしたのだからと主張してゆずりません。畠主と藪主の間に竹ノ子をめぐって所有権争いが始ります。

山脇和泉流元業のこと　その一

佐藤友彦

先に本紙第一六九号で「狂言太夫山脇和泉家流伝統之碑」と、これを建立した七代目山脇和泉元業の墓の所在についてご紹介したが、この元業について少し詳しく触れてみたい。

元業は幼名を幾松と云い、御自見町医師服部松斎の子で、寛政四年十一才で六代和泉元貞の養子となり、山脇四郎といった。この時五代和泉元喬（隠居して弁蔵）も在世し、元貞、弁蔵の二人のもとで修練し、文化三年、弁蔵

が八十八才で没すると、四郎（後に元業）は正式に召出され、切米六十石江戸六人扶持、尾州四人扶持を受けることになった。四郎この時二十五才六代元貞は六十才であった。

元業は几帳面な性格の持主であったらしく、養父であり師である元貞の教えを忠実に守り、その多くを聞書に書き記した。そして文化十三年七十才で元貞が没すると、七代元業として家督を相続し、この聞書等をもとに元業のライフワークともなった「雲形本」を集大成して行ったのである。現行名古屋の狂言はこの「雲形本」に依って上演されることが多い。

六代元貞からながめよう。元貞は五代元喬から芸を相伝、天明七年四十一才で家督を相続し、名人として誉れが高かった。また芸道修業のかたわら本居宣長に従学し、すゞの屋門の歌人としても有名であった。古書の研究を常に怠らず、狂言語彙の訓古注釈、古体の狂言の趣意解釈等学識の深いものがありまた当時の狂言を多く改訂整備し自ら積極的に試演したりした。これらがそっくり元業に受け継がれ、集大成されたと云ってよいだろう。

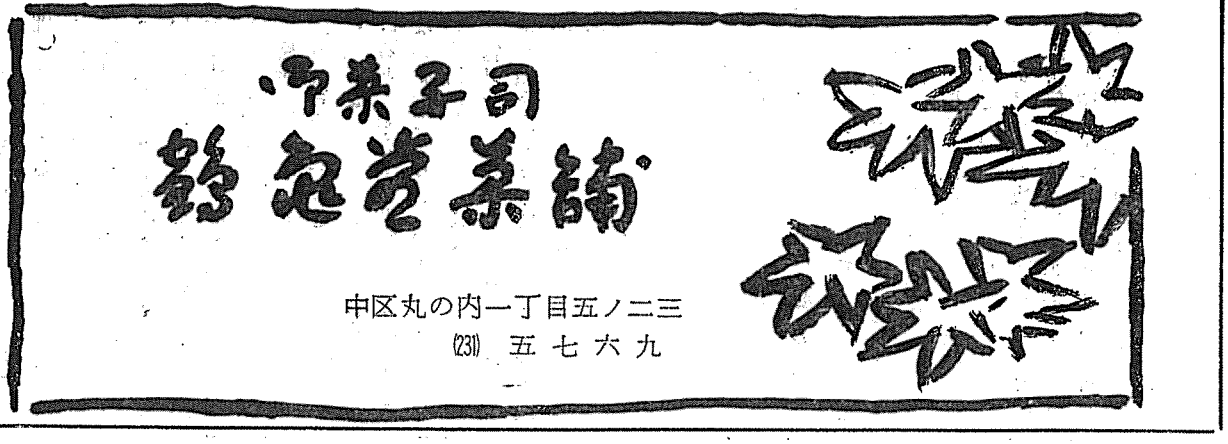
元貞は文化十三年六月十四日、妻の春とともに変死している。この朝細君が沢庵漬をとりに物置へ行ったが、アット大きな声がした。元貞が不審に思って行って見ると細君が倒れている。その時元貞も突然アット大声をあげて倒れてしまった。人々が騒ぎ出した時には二人ともこと切れていたという。時に元貞七十才、妻春五十八才。（近世なごやの裏話より）　（続く）

狂言団子

野村広二

梅雨から夏にかけて読む三・四の本に香西精氏の「世阿弥新考」を入れるあれには「とろうきよう考」の名文がのる。とろうきようとは都良香（ミヤコのヨシカ）のこと。読むたびに新鮮な滋味を覚える。実はわが家から都心にでるバス路線の途中、そこはまた蓬左文庫・徳川美術館へ行く道が分れるところであるが、良香園という茶舗がある。その前を通るたびにその看板が目に入る。するとそれがすぐ「とろうきよう」につながる。口の中で「とろうきよう」を繰り返えす。もう長い間のことである。あの茶舗の店名がどう読むか知らないまま過ぎてきたが、先日思い切って電話をかけ、訳を話しておたづねしたところ、「りょうこう」と読む、古いお家であることがわかったお礼を言って別れたが、それからもその前までくると「とろうきよう」のことがやはり鮮明に浮んでならない。

さて、今年は放送（NHK）が始って五十周年を迎えた。邦楽番組が広く組まれて五十年たつ。昭和のはじめ中学に入って間もなくラジオが置かれたわが家では、邦楽番組が落語・講談・浪曲など演芸物とあわせて歓迎された。春か秋の彼岸の中日の五流謡曲。お経のようだった。雅楽も。平曲（名古屋）をきいた記憶は薄い。それに蚊帳に入って連夜きいた常盤津・三世相、梅雨時の新内・膝栗毛ほか江戸邦楽など、三年生のとききいた日本詩歌講座（昭三名古屋）の謡曲・熊野と松風、（八高・小室由三教授）とあわせて今でもなつかしく思い出す。それから実に五十年近く本当によくきき、よくみてきた。邦楽の味を楽しむとともに邦楽の心を目と耳から教えてもらった。それは今能や狂言をみてその高く広い境地に少しはふれられるまでになれた私の古典（人生）探究の大きくやさしい百科全書であった。戦後謡曲・狂言放送も時間とやり方こそちがえ、歴史的展望をまじえて、随分長い間組まれどちらも名人中堅・若手の声に親しみ、美しくまた軽妙な姿に接してたんのうさせてくれた。テレビでははじめの頃の「邯鄲・傘の出」（後藤得三）が記憶に新しく、近年の「土蜘蛛・千筋之伝」（金剛巌）「卒都婆小町（桜間道雄）「善知鳥」（高橋進）ラジオの「関寺小町」（桜間弓川・梅若六郎）は特に感銘をうけた。よき狂言も数多い。この頃では一調・仕舞五番とか、狂言小謡・小舞の部類の放送がみたりきいたりしたいと思うこと切である。ほかにNHKの放送のことを二つほど申し上げると、六月十八日の「ニュースセンター9時」で簫（しょう）の音の再現が紹介された。この楽器と尺八と横笛の合奏もきけたが再現者は芝祐靖氏。音の配列がピアノと反対で、右が低音左が高音というように聞いた。能では富士山に「簫笛琴笙篌（くご）」羽衣・当麻に「笙笛琴云々」天鼓に「糸竹の手向の音楽」大会に「微妙の音楽」など散見し、富士山の楽器名がこれに当るけれども、くわしくはいえない。なお笙篌の方はすでに再現ずみのように思った。また先頃そ



望の能楽殿ができ上ったのが昭和三十年。それから晴雲雲霞。過ぎ去った二十年の年輪が、希望と善心、演能と観能、晴れやかなまた悲しい色々の思い出をよみがえらせてくれる。それを胸に押し包んで、これからも名古屋の能や狂言が栄えることにあわせて、来る八月の記念能が盛会である様祈りたい

催しは夏の院展(松坂屋)、東山魁夷唐招提寺障壁画展(丸栄)、永楽屋と北斎展(蓬左文庫)。因みに金剛流片野東四郎氏は書店・永楽屋主人東四郎の七代目に当る。

放送はNHK劇場・能と狂言・海人(桜間道雄)井杭(野村武司ほか)、音楽の世界・宗教と音楽・仏教(声明・講式と謡曲、小泉文夫)女姓手帳・木偶を彫る・娘誕生(能のオモテと人形のカシラの目、大江巳之助)同・私の女人像から・劇作家紫式部(源氏物語と能・カブキ、村山リウ)文化展望・源氏物語の周辺)光悦謡本・小鼓胴銘夕顔など、白畑よしほか)をみ、思い出の名人集・野口兼資(一調勧進帳ほか以上NHK)能を楽しむ(内藤泰二、FM愛知)をきく。

本は古代出雲帝国の謎(伝統演劇〈能狂言〉と北方騎馬民族文化・農耕民族文化のつながり、武智鉄二、祥伝社、ノン・ブック八二)日本芸能の世界(林屋辰三郎、NHKブックス一八四)国文学・日本文学史の構想(社寺の芸能徳江元正、町衆の文学・島津忠夫、六月号)日本演劇史(第三章中世に能・能狂言、付参考文献・年表、浦山政雄・前田慎一・石川潤二郎、桜諷社)「出を待つ」(石橋、前田青邨展、芸術新潮七月号など。)

熱田神宮能楽殿創立二十周年

記念能

昭和五十年八月二十四日午前十時始
於　熱田神宮能楽殿

素謡　神歌　片野東四郎　水野泰典

能　養老　武田邦弘　小島一英　梅田邦久　高安勝久　飯富雅介　立石澄雄　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦

水波ノ伝　小舞　貝盡し　佐藤友彦

仕舞　小袖曽我　高橋瞭一　加賀敏彦　小督　加藤保彦
実盛　水藤元三　紅葉狩　長谷川章
雲林院　加藤総兵衛

囃子　熊坂　柴田牧武　笛鉱一　山口亮　鬼頭季信
葛城　戸田和花　月高木美智子
草紙洗　竹内澄子　杜若　服部紐枝
仕舞　葵上　玉井弘子　班女　有賀滋子
難波　熊沢恵美子　小鍛治　吉田紗
連吟　千手　加藤良久　生駒美代子　前野郁子

狂言　井筒　内藤泰二　西村欽也　吉田定男　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
間　高砂　佐藤秀雄　日比野圭昭
仕舞　鵜之段　水谷泰典　加茂　前田茂穂
松風　吉川周子　杜若　林鉄郎

狂言　二人袴　野村又三郎　佐藤卯三郎　井上礼之助　大野弘之
一調　鵜飼　二井栄逸　鬼頭八郎

囃子　枕慈童　衣斐正宣　河村総一郎　福井良久　池田茂　森本重一
老松　柴田初太郎　弱法師　殿島修二
仕舞　笠之段　塚本秀雄　隅田川　久田秀雄
半蔀　杉村竹翠　鮎之段　河村鉦二
笹之段　佐藤太俊

能　舟弁慶　松山明道　長田暁　高安滋郎　飯富雅介　笛寛鉱一　柳原富司忠　助川寛夫　真之伝　船中之語　船歌　井上松次郎
間　三男

入場券　A席二、〇〇〇円　B席一、五〇〇円

第十六回

大衆能

昭和五十年九月七日午后一時
愛知県文化講堂

能　枕慈童　豊島三千春　高安勝久　吉田定男　福井良久　助川竜夫　藤田昭彦
後見　重本昌三　豊島弥左衛門　片野東四郎　地謡　小林忠三　菊川訓三　日比野圭昭　清水信明　水谷泰典　豊島百々　康治

仕舞　放下僧　熊沢恵美子　地謡　高木美智子　生駒美代子　前野郁子　加藤良久　服部紗枝　有賀滋子
囃子　松風　長田暁　河村総一郎　後藤孝一郎　地謡　冨田陽二　二井栄逸　藤田六郎兵衛　加藤豊　藤田直輝

仕舞　難波　武田邦弘
敦盛　久田徹二　地謡　加藤総兵衛　高橋瞭一　梅田頼邦　河村鉦二　高野透
阿漕　塚本秀雄

能　三山　吉田俊彦　衣斐正宣　高安滋郎　福井啓次郎　河村総一郎　鬼頭季信
間　佐藤友彦
後見　竹内澄子　戸田和　地謡　加藤勝利　鬼頭喜男　稲川寿一　小沢喜一　竹腰勝一　内藤泰二　鈴木義久　辰見孝

囃子　天鼓　梅田邦久　地謡　田中武　加藤保彦　牧本貞　柴田秀雄　久田徹二　吉田定男　柳原富司忠　鬼頭喜太郎　覚三男

能　熊坂　本田光洋　地謡　後藤正男　前田茂穂　林都築　殿島鉄郎　伊藤俊明　鷹見正行　今枝郁雄　靖雄融　佐藤今枝　井上礼之助　修二

狂言　茸　中村和男　吉田妙　水藤又吉　杉村竹翠　井上松次郎　野村又三郎　佐藤友彦　大野弘之　歌村鴻助　今枝良治

能　土蜘蛛　高安勝久　西村欽也　飯富雅介　河村総一郎　山口亮　鬼頭八郎　森本重一　光絃　岡田武弘　武田邦弘　梅田邦久　真柄次　青木契雲　後藤嘉夫　犬飼未吉　長谷川章
間　久田秀雄　大野弘之
後見　泉嘉夫　佐藤太俊　地謡

附祝言　会員券前売一、〇〇〇円当日売一、三〇〇円

の制作「狂言三代」（野村万蔵家放送ずみ）が第九回ダブリン国際テレビコンクールで銀賞（第二位）を得たことを伝えていた。

名古屋の四・五・六月の能は半部（万三郎）舟弁慶・重前後替（大槻文蔵）巻絹（橘岡久共、元正に代勤）花筐（六郎、以上観世会）大原御幸（英雄、宝生会）が佳。放下僧（喜之）ばみられなかった。右のうち、代勤の久共氏は清そな姿（口元の可愛い女面）で美しく舞い満員の見所の期待にこたえた。能は年末の稽古の賜物であることを物語るよい例、大層うれしかった。大原御幸は切りで女院が法皇と相対して別れ給う場景がこの曲に深い味わいの光彩を添えていた。六郎氏の花筐には特に感銘をうける。二月の野宮（梅若実追善能）とおなじく言いようのない能の美しさとおもしろさを感得した。詩情のゆたかさ・端正・激情の品のよさ・冷厳・活達、どれも私の胸に楽しい刻印を押していった。これにあわせて中部金剛会のあたらしい出発振りの目覚しかったことを付記したい。狂言は、第十回を迎えた名古屋狂言小劇場が二夜連続の上演。どちらも一杯の愛好者に満足してもらい、次の公演を約束し合って別れた。新構想の実現を鶴首して待ちたい。それと野村又三郎舞台五十年記念狂言と素謡の会（也留舞会）和泉流狂言大会（新城狂言同好会・玉石会・大声会・名古屋和泉会・狂言共同社共催）も盛会でよかった。

今年は秋が来ると、熱田能楽殿が満二十年の歩みをしるすことになる。待

七、八、九月の予告

七月　六日　朝日狂言会

狂　鞠猿　佐藤卯三郎　佐藤秀雄　佐藤友彦　佐藤融
狂　瓜盗人　茂山千之丞　茂山千五郎
狂　蝉　和泉保之　井上松次郎　大野弘之
狂　素袍落　茂山千五郎　茂山千之丞　茂山千作
狂　祢宜山伏　井上礼之助　井上祐一　野村又三郎　今枝靖雄

七月十九日　鍵雲会別会
宗家御継承慶祝重文綜合指定謝恩
狂　七騎落　竹腰勝一　西村欽也　井上松次郎
能　熊野　吉田俊彦　高安滋郎
能　景清　風岡勇二　西村欽也
能　石橋　内藤泰二　宝生英照　宝生英雄　高安滋郎
狂　いろは　大野弘之　佐藤友彦
狂　三人長者　佐藤卯三郎　佐藤秀雄　井上礼之助

七月廿六日　九皐会
狂　羽衣　有賀滋子　西村欽也
狂　鵜飼　観世武雄　高安滋郎
狂　伯母ケ酒　井上松次郎　佐藤友彦

八月　二日　薪能

八月　三日
夏休み子供劇場　於名演小劇場
狂　二人大名　佐藤友彦　鷲見政行　佐藤秀雄
狂　梟山伏　井上松次郎　佐藤友彦　大野弘之

八月廿四日　能楽殿廿周年記念能

九月　七日　大衆能　於文化講堂

九月十四日　観世会
能　俊寛　大槻秀夫　高安滋郎
狂　海士　片山博太郎　西村欽也　井上礼之助
狂　子盗人　井上松次郎　佐藤友彦　大野弘之

九月十五日　鍵雲会
能　熊坂　佐藤稔　大野弘之
能　蝉丸　小沢喜一　平子稲美
能　融　内藤泰二　佐藤卯三郎
能　竹生鳥参　佐藤友彦　佐藤秀雄　井上松次郎

九月廿日　九皐会
能　清経　塚本秀雄　高安滋郎
能　天鼓　観世喜之　西村欽也　野村又三郎
能　栗焼　佐藤卯三郎　佐藤秀雄

九月廿一日　宝生会
能　花筐　野村蘭作
能　天鼓　野口緑久　大野弘之
狂　禁野　井上礼之助　井上松次郎

九月廿四日　山本博之三回忌追善能
狂　二人静　梅若六郎　西村欽也　大野弘之
能　当麻　山本勝一　高安滋郎　佐藤友彦
狂　武悪　野村又三郎　井上松次郎　井上礼之助

九月廿八日　竹韻会

第十回　薪能

昭和五十年八月二日（土）　午后五時卅分始
於　熱田神宮神楽殿前　（雨天順延）

能組

囃子　加茂　長田驍　福井寛　福井良久　二井栄逸　富田靖男　富田陽二　山本才　地謡　藤田六郎兵衛　川竜夫　助鉱一

仕舞　三輪　有賀滋子　地謡　前野都紗枝　前野眼子　加藤良妙　吉田代　生駒美市子　塚本恵子　田本光洋　林鉄郎　後藤正男

仕舞　鞍馬天狗　前田茂穂　地謡　森本重一　高野瀬透　高木美智子　熊沢恵美子　殿島修二

能　小督　高安勝久　佐藤友彦　福井啓次郎　寛鉱一　青木武弘　加藤総兵エ　長谷川章　久田秀雄　柴田牧武　中村和男　佐藤太俊　後見　梅田邦久　杉村竹翠　地謡

囃子　鉄輪　菊川憲三　河村総一郎　柳原富司　日比野圭昭　百々康治　豊島三千春　鬼頭八郎　鬼頭季信　片野東四郎　水谷泰典　地謡

火入式　長谷晴男
御挨拶　本山政雄

能　花月　西村欽也　河村総一郎　山口亮　寛三男　竹内澄子　佐藤秀雄　内藤泰二　加藤勝利　稲川寿一　平子稲美　竹腰勝一　鬼頭嘉男　吉田俊彦　鈴木義久　衣斐正宜　巳孝　後見　戸田和　玉井弘子　地謡

狂　太刀奪　野村又三郎　井上松次郎　井上礼之助

能　紅葉狩　高安滋郎　飯富雅介　佐藤友彦　大野弘之　後藤孝一郎　藤田昭彦　池田茂　吉田定男　高安勝久　英一　小島　太俊　佐藤　高橋瞭一　高橋敏彦　加賀　後藤契雲　塚本秀雄　梅田邦久　武田弘　加藤保彦　犬飼宋吉　田中武　岡田光紘　真柄米次　増田一雄　地謡　牧武　柴田　地謡　河村鉦二

入場券　前売八〇〇円　当日売一、〇〇〇円

昭和50年9月1日発行
発行所
名古屋市中区橘一丁目7−5
井上直氏御方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
日東印刷工業株式会社　電(481) 7445

狂言人語

この八月二十四日には「熱田能楽殿創立二十周年記念能」が盛況のうちに催されました。誠に感無量のものがあります。戦後は松坂屋仮設ホールを初めとし、商工会議所ホール、御園座、その他のホール会場での設営、演能の苦労が今さら偲ばれるものです。

狂言界でも能楽殿建設の中心となって活躍した井上新三郎（現礼之助父）が創立を見ずして他界したこと。新装なった能楽殿で催された「先覚物故者追善狂言会」の想い出など枚挙にいとまがありません。その後、新三郎弟彦四郎他界しましたが、八十才を越えてますます元気な姿を舞台に見せる佐藤卯三郎、今は舞台を遠ざかっておりますが河村丘造も長老として健在です。能楽殿創立当時まだ子供狂言で小さな姿を見せていた者の子供が、早や今日舞台を踏む様になりました。今後とも、この能楽殿の歴史の中に、私達の歩みをしっかりと刻み込むべく、努力して行きたいと思います。

さて秋に入り、催能も最も充実した時期に入ります。各流の定期能も目白押しに予定され、追善能、別会などが盛んに催されます。狂言の方では十月の予告にある通り、野村又三郎師の舞台生活五十年記念狂言会が十月十八日に催されます。大蔵、和泉両宗家を初め両流の長老、中堅、若手の多くが参加しての催しは、近年にない盛大な催しと云えましょう。多いに期待されます。

〈おわびと訂正〉

先号第百七十一号で野村広二氏の「狂言団子」の記事が③面と④面が組み違えてありましたこと、おわび申し上げると共に訂正致します。

九月の催能

九月七日　大衆能　於文化講堂

能　枕慈童　豊島三千春　高安勝久
能　三山　衣斐正宜　高安滋郎
間　佐藤友彦
能　土蜘蛛　杉村竹翠　西村欽也
間　大野弘之
狂言　茸　井上松次郎　野村又三郎　佐藤友彦　大野弘之　歌村鴻助　鷲見征行　今枝郁雄　今枝靖雄　佐藤融　井上礼之助

九月十四日

能　俊寛　観世会　大槻秀夫　高安滋郎　井上礼之助
間　海士　片山博太郎　西村欽也　佐藤秀雄
狂言　盗人　井上松次郎　佐藤友彦　大野弘之

九月十五日

能　熊坂　鍵雲会　佐藤稔　高安勝久　大野弘之
能　蝉丸　小沢喜一　稲美平子　西村欽也　佐藤卯三郎
間　融　内藤泰二　高安滋郎　井上松次郎
能　竹生嶋参　佐藤友彦　佐藤秀雄

九月廿日

能　清経　塚本秀雄　高安滋郎
能　天鼓　観世武雄　西村欽也　野村又三郎
能　栗焼　佐藤卯三郎　佐藤秀雄

九月廿一日

能　花筐　宝生会　野村蘭作　高安滋郎
能　天鼓　野口緑久　西村欽也　大野弘之
狂言　禁野　井上礼之助　井上松次郎

九月廿四日

能　当麻　山本三回忌追善能　山本勝一　高安滋郎　佐藤友彦
間　二人静　梅若六郎　西村欽也
狂言　武悪　野村又三郎　井上松次郎　井上礼之助

狂言解説

茸＝或る家の庭に大きな茸が生え、取っても取っても又生えます。気味が悪った主人は行力の強い山伏を頼み、祈り消してもらおうとしますが、山伏の祈りにつれて茸が増え、遂に庭中が茸となってしまいます。

子盗人＝或る家に盗みに入った男、座敷で物色中に、寝かせてあった子供を見つけました。ポッチリ目を開けた子の可愛いこと。自分の立場も忘れ、思わず抱き上げ子供を夢中であやしている内、家人に見つかってしまいます。

竹生嶋参＝主人に無断で竹生嶋参りをした太郎冠者。主人の機嫌をなおそうと、人から聞いた話をしているうち、くちなわの秀句を忘れ、つまってしまいます。

栗焼＝丹波の伯父の許より贈られた栗を焼く様に云付けられた冠者。焼き上った栗のあまりうまそうなのに一つ手をつけたのが最後、あとは口が止まらず、気付いた時には一つ残らず腹の中です。さあこの云い訳には——。

禁野＝禁野へ狩猟に出た大名。丁度通りかゝった通行人を威して供にしたまではよかったのですが、弓矢を持たせたことから主従逆転。大名は刀から着ている物までとられて逃げられてしまいます。一人残された大名はこの禁野について昔物語を思い出しました。

武悪＝不奉公者の武悪を討って来る様命ぜられた太郎冠者。背に腹は替えられず武悪のもとへ向いますが、結局はこれを逃して、主人には討ったと報告します。これを聞いた主人は憂さ晴らしに清水へ。命が助かった武悪もお礼参りに清水へ。

狂言団子

野村広二

この夏は後半になって、家事都合（老人の急病ほか）から、予定した本は半分も読めず、貴重な資料をいただい

た方々へのお礼もおくれてまことに申訳なく、この紙面を借りてお詫びを申し上げたい。それでも七月下旬から平家物語の世界（水原一ほか、NHKテレビ、市民大学講座、再放送）を受講したが、十五夜続けるのはなかなか努力を要したけれど、全部きけてよかったと思った。そして黒川能・鐘巻（下座、国立小劇場、NHK録画、放送は以下おなじ）三宅藤九郎新作狂言集（能楽書林）、レオナルド・ダヴィンチのマドリッド手稿、知られざるレオナルド（岩波書店、図書六月・レオナルド特集号関連）の出版、共同訳聖書・ルカスによる福音が来る九月十五日に刊行（日本聖書協会）されること（朝日、九・一）が私にとって大きな話題であった。共同訳によればイエズス、イエス、イイススがイエススとなって表記されるとのこと。三宅さんの新作集の「復活」はイエズス（カトリック）になっている。この「復活」は佳篇くわしくは別記）。因みにこの本の出版記念会が九月二十日に催される。まことにめでたい。また京都前西芳雄氏から秋の東京金剛会（九・一三）の小冊子をいただく。毎号随想が一文載るが、これには同氏の「左門治の代役」が光彩を放つ。愛知博物館能舞台披番組（狂言一六三・五・六・七号）の喜太六平太と寺田左門治代役について一つの卓見を述べられた。

さて七月は朝日狂言会。名古屋勢のおだやかでやわらかく、淡々として滋味に富む味わいが靭猿・弥宣山伏の二番と蝉（アドの僧松次郎）が今年も味わうことができた。明るいおかしみと式楽の格調の中間を行く演じ振りの充実は目ざましい。鍵雲会別会では宝生英雄・英照父子が石橋・連獅子（後、前は催主内藤泰二）を舞う。けんらん荘重。八月は熱田能楽殿創立二十周年記念能。日頃この舞台で幅広く活躍される名古屋勢が全員番組面に名を連らねて、名古屋の能と狂言を祝う。能楽の友特集号（一〇四号）に私も祝詞をかねて随想一篇を寄せさせていただいたが、ここに余録を二・三しるすと、鏡板のたっぷりと描かれた松は、水道橋や金剛、神戸能楽殿と似て、東京や京都の観世能楽堂の松とは異なる。揚幕（五色）は見所から見て左から紫・白・赤・黄・緑（青）の順序であるが東京観世能楽堂のかけ方とは反対（観世テレビ能所見）。また乗物は今では栄町・新瑞（あらたま）橋方面からは地下鉄で神宮西・熱田伝馬町下車能楽堂へ。名古屋駅方面からは名鉄・地下鉄兼用であろう。

放送はテレビでNHK劇場・道成寺もの二題（壬生狂言道成寺、沖縄・組踊執心鐘入、国立劇場）芸能百選・假面登場（岐阜県能郷の狂言ほか）若い広場・古典芸能のなかで（茂山真吾ほかドキュメント日本人・狂言にかける若者（和泉保之・鳥越正夫ほか、東海テレビ）。ラジオは花筐（金剛巌）名取川・猿歌（野村万之亟）。本は三宅藤九郎新作狂言集（朝日、八・二七）野村万蔵・「夏に技冬に声」の事（言葉と人間、加藤周一、朝日七・四）日本文学史序説・上（加藤周一、筑摩書房以下次号。

十月の予告

十月　四日　淡交会
橋岡久太郎十三回忌追善
能　藤戸　橋岡久太郎　西村　欽也
間　佐藤卯三郎

定家　観世元正　高安滋郎
間　佐藤秀雄
能　融　奥田善助　西村欽也
間　下田雄三　佐藤友彦
狂　宗論　野村又三郎　井上松次郎
十月五日　九皐会　井上礼之助
能　半蔀　山村昌子　高安滋郎
間　佐藤友彦
狂　杭か人か　大野弘之　井上礼之助
十月十日　幽花会　片山慶次郎　西村欽也
半能　巴　猶恵会　囃子会
十月十二日　やるまい会別会　井上松次郎
十月十八日　狂　末広がり　和泉保之　佐藤卯三郎
〃　鳴子　野村万之丞　野村万蔵　野村万之介
〃　花子　野村又三郎　野村万之丞　野村万作
〃　呼声　茂山千五郎　茂山千之丞　茂山忠三郎
船中之語　高安滋郎
那須之語　大蔵弥太郎
住吉　野村万蔵
海道下り　茂山千作
御田　三宅藤九郎
弓矢太郎　野村万作　三宅右近　井上祐一　能村英丘　佐藤友彦　井上礼之助　大野弘之　井上松次郎　佐藤秀雄
十月十九日　能　花月　青陽会　服部紗枝　立石澄雄
間　井上祐一
能　蝉丸　佐藤太俊　西村欽也
間　佐藤卯三郎
能　須磨源氏　山本真義　西村欽也
間　佐藤秀雄　大野弘之
狂　地蔵舞　一謡会　井上礼之助
十月廿五日　能　葵上　海田トシ子　高安滋郎
間　野村又三郎
十月廿六日　中部金剛会
山田仁三郎追善
能　経政　百々康治　高安勝久
能　雪　豊島弥左衛門　西村欽也
能　融　金剛巌　高安滋郎
間　大野弘之
狂　無布施経　井上松次郎　井上礼之助

皮膚科　泌尿器科
大野皮膚科医院
医学博士　大野弘之　（狂言共同社同人）
診療時間　午前10時～午後1時　午后3時～午後6時
名古屋市西区香呑町6—56
ダイヤモンドシティー4階
名西医療センター
木曜・祭日・土日曜午后・休診
電話（052）531—5553

狂言

昭和50年10月1日発行
発行所
名古屋市中区橘一丁目7-5
井上重兵衛方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
日東印刷工業株式会社　電(481) 7445

狂言人語

秋も深まってまいりました。芸術にふさわしく、今月も催能は盛んです。

十月の話題は「野村又三郎舞台五十年記念狂言会」です。狂言界の名門又三郎家は、尾張藩のお抱え狂言師として特に名古屋ともゆかりが深く、当代又三郎(十一世)昭和三十四年に当地名古屋に居を移してより「やるまい会」を主宰し、活躍を続けていることはご承知の通りです。舞台生活五十年という大きな区切りを迎え、ます〳〵円熟味を深める師の今後の活躍が大いに期待されます。

十一月二十三日には、別掲案内のごとく「第十五回和泉狂言会」が開催されます。変化に富んだ曲目五番を揃え狂言の深い味わい、その魅力、おもしろさを充分満喫させてくれることと思います。是非お出かけ下さい。

扨、明治の名古屋狂言界で中心となって活躍し、狂言共同社設立の中心メンバーとなった初代井上菊次郎(現松次郎祖父)の人と芸について、小林責氏の筆により、能楽タイム紙面に五回にわたって連載中です。晩年上京して名人の挙れ高く、中央狂言界にその名をなした先覚者の活躍が紹介されております。

十月の催能

十月　四日　淡交会
橋岡久太郎十三回忌追善
能藤　間　戸　橋岡久太郎　西村　欽也
　　間　　佐藤卯三郎
鞱定　間　家　観世　元正　高安　滋郎
　　佐藤　秀雄
能　融　奥善助　下田雄三　西村　欽也
　　間　佐藤　友彦
狂宗　論　野村又三郎　井上松次郎　井上礼之助
十月　五日　九皐会
能半　間　部　山村　昌子　高安　滋郎
　　佐藤　友彦
狂杭か人か　大野　弘之　井上礼之助
十月　十日　幽　花　会
半能　巴　片山慶次郎　西村　欽也
十月十二日　猶恵会　囃子会
十月十八日　やるまい会別会
狂末広がり　和泉　保之　井上松次郎　佐藤卯三郎
〃鳴　子　野村万之丞　野村　万蔵　野村万之介　野村万之丞　野村万作
〃花　子　野村又三郎　茂山千之丞　茂山忠三郎
〃呼　声　茂山千五郎　高安　滋郎
船中之語　大蔵弥太郎
那須之語
住　吉　野村　万蔵
海道下り　茂山　千作
御　田　三宅藤九郎
弓矢太郎　野村万作　三宅　右近　井上祐一
能村　英丘　佐藤友彦
井上礼之助　大野弘之
井上松次郎　佐藤秀雄
十月十九日　青陽会
能花　間　月　服部　紗枝　立石　澄雄
　　井上　祐一
能蟬　間　丸　佐藤　太俊　西村　欽也
　　佐藤卯三郎
能須磨源氏　山本　真義　西村　欽也
　　間
狂地蔵舞　佐藤　秀雄　井上礼之助
十月廿五日　一謡会
能葵　間　上　海田トシ子　高安　滋郎
　　野村又三郎
十月廿六日　中部金剛会
山田仁三郎追善
能経　政　百々　康治　高安　勝久
能雪　豊島弥左衛門　西村欽也
　　金　剛　滋　高安　滋郎
能融　間　大野　弘之
狂無布施経　井上松次郎　井上礼之助

狂言解説

抗か人か＝広い屋敷に一人で留守居を云い付けられた臆病者の冠者。陽が暮れるとおっかなびっくり、それでも殊勝に槍を抱えて夜廻りに出ました。ところが暗に庭に何やら立っています杭かと思えば杭の様でもあり、人かと思えば人の様でもあり……。

地蔵舞＝旅の出家に一夜の宿を乞われた亭主、所の大法で泊める事が出来ぬと断りましたが、出家の頼みで笠だけを泊めるとて預りました。ところが気付いて見ると預った笠をかぶった坊主がいつの間にか上り込んでおります笠に宿をかりたという出家の機転に感じた亭主は、大法をまげて一夜の宿を貸すことになりました……。

無布施経＝毎月きまって壇家をおとずれる坊主。今日は勤めも終って帰ろうというに、いつもくれるお布施が出ません。何とか気付かせようと立ち戻って話をしたりするのですがいっこうに壇那は気付きません。最後の手段と着ていた袈裟をふところにかくして、再度立ち戻ります……。

狂言団子

野村広二

九月前後はテレビの時代劇ドラマをよくみた。時代は徳川。処は江戸。みていると、たびたび能や狂言につながる場面が組まれていた。「梓右近隠密帖」(竹腰無我、CBC)では、家光謀殺の場面で、もちろんこれは失敗するが、舟弁慶の後シテ(首謀者)出現とか松山藩江戸邸夜能のところで古い能舞台の鏡板の松が四・五本、それが一ノ松・二ノ松位の大きさの松で、描かれていた、これは珍しかった。「旗本退屈男」(高橋英樹、CBC)になると、上方能役者の用いる女面が事件を解く鍵になっていたが、放送中CMが入る直前のパターンはこの題名に女面が添えられていた。「大江戸捜査網」(杉良太郎ほか、中京テレビ)では結婚式の席上高砂の待謡が謡われる。これは今までに数多いまた劇映画「眠狂四郎」(大映・市川雷蔵、東海テレビ)だったと思うがかって美しかった自分の顔のやけどあ

とをこれも女面でかくす将軍家の息女が狂四郎の相手役になる筋書もあった。それに「クイズ・グランプリ」（東海テレビ）の出題でシテとワキ、野村万蔵・三宅藤九郎の所属する狂言の流派名、鏡板の松、世阿弥の花伝書などを散見。これは昨年からのことである。

連続人形劇・真田十勇士（NHK）、柴田錬三郎原作、辻村ジュサブロー人形）となると、これに登場する天笠の波羅門僧まびたつがしばらく石となってかくれ、用あるごとに出現しては真田方を助けるこれが張良の黄石公と似る。この猿飛佐助は美しくりりしい。

「元禄太平記」（NHK、南条範夫原作）では江戸の同志が屋形船のなかで結束を固める場面に謡が謡われた。放送開始の頃刃傷の遠因ともなる吉良所望の茶入（浅野家蔵）に狂言袴の銘がつけられていた。ざっとこうである。さて、九月の能は海士・懐中之舞（片山博太郎）二人静（梅若六郎・景英、山本博之追善能）当麻（山本勝一、〃）花筐（野村蘭作）天鼓（野口禄久）、十月になって藤戸（橋岡久共、橋岡久太郎追善能）定家（観世元正、〃）。どれもよかった。そのよさは別記したい。狂言は、武悪（又・松・礼）と宗論（又・松・卯）をみる。松次郎・又三郎、松次郎・礼之助氏たちのイキが合ってまことに好演。橋岡追善能の日、能果てる頃はもうとっぷりと日も暮れ、雲厚く月も出ぬ参道をひとり歩くと、金モクセイの香りが久太郎氏追憶の情をあらためてかき立てた。催しは山本追善能のあと杉本健吉画伯の墨彩大和展（丸栄）に駈けつける。同名の画帖（求竜堂）出版記念展示会。杉本画伯のことばのように、変貌していく大和の社寺風景、春夏秋冬が目の中になつかしく飛び込んできた放送は葵上・無明之祈（豊嶋弥左ヱ門解説権藤芳一、NHK、以下おなじ）翁舞（奈良県奈良豆比古神社、お国自慢にしひがし）をみ、鏡男（和田喜太郎鎌腹（善竹圭五郎をきく。本は道―中世の理念と能・狂言、小西甚一、講談社現代新書、日本の古典3）上手になるな（野村万蔵、ちくま十月、未見）江戸の昔話（座談会、室町時代の狂言と「浮世風呂」と今の標準語、市原豊太ほか、心十月号、平凡社）など。

第十五回 和泉狂言会

昭和五十年十一月廿三日午后一時始
熱田神宮能楽殿

番組

船渡聟　男 井上松次郎　聟 井上祐一　女 佐藤秀雄
八句連歌　何素 三宅藤九郎　何素 和泉保之
素囃子　安宅　滝流シ
大盤若　僧 大野弘之　神子 佐藤友彦　藤田六郎兵衛　後藤孝一郎　吉田定男
井杭　井杭 今枝郁雄　算盛 佐藤卯三郎　拉主 井上礼之助　何素 井上松次郎
止動方角　太郎冠者 佐藤秀雄　主人 野村又三郎　伯父 井上礼之助　馬 大野弘之

主催 名古屋和泉会

会費　指定席一、五〇〇円　普通席一、〇〇〇円　階上席八〇〇円
取扱所　各出演楽師宅　各百貨店プレイガイド
事務所　中区橘一丁目七―五　井上方　電(911)一四三〇

十一月・十二月の予告

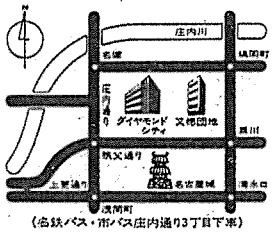
十一月二日　能　清経　風韻会　守部啓子　高安滋郎
能　二人静　瞰島博子　西村欽也　高田みね子　高安滋郎
能　舟弁慶　間　奥田薫　大野弘之　井上礼之助
十一月三日　狂　柿山伏　佐藤友彦　幸友会　雛子会
十一月八日　能　楊貴妃　間　修飄会　沢田春子　高安滋郎
十一月九日　能　野宮　間　観世寿夫　宝生閑　井上松次郎　西村欽也　佐藤秀雄
能　国栖　間　大西信久　野村又三郎　佐藤友彦　大野弘之
十一月十五日　狂　鈍太郎　佐藤卯三郎
十一月十六日　能　舟弁慶　間　盛義後援会　梅若盛義　高安滋郎　野村又三郎　佐藤卯三郎　井上礼之助
十一月十六日　狂　呂蓮　野村又三郎
十一月十六日　邦謡会　やるまい会　於 栄能楽堂
十一月廿二日　能　小督　間　麦の会　衣斐正宜　高安勝久　佐藤秀雄
能　六浦　間　長田鶴　高安滋郎　井上松次郎
十一月廿三日　狂　清水　野村又三郎　佐藤卯三郎
十一月廿四日　能　海士　和泉狂言会　壷泉会　芳枝　輪島亢英　高安滋郎　井上礼之助
十一月廿九日　狂　竹生島参　野村又三郎　井上松次郎　鬼頭五朗追善能
十一月　七日　能　石橋　内藤泰二　西村欽也　義捐金募集能
十二月　七日　能　咸陽宮　河村鉦二　西村欽也　井上礼之助
能　班女　間　佐藤太俊　高安滋郎　佐藤卯三郎　井上松次郎
能　舟弁慶　間　戸田和　高安滋郎　玉井博祐　野村又三郎
十二月廿一日　青少年のための芸術劇場

ゆたかなくらし 楽しいショッピング

木曜定休

500台収容
駐車場完備

新しい生活がある街――
ダイヤモンドシティ
名西ショッピングセンター
名古屋市西区番番町6-56　TEL 523-2444



昭和50年11月1日発行
発行所
名古屋市中区橘一丁目7−5
井上重兵衛方 電(321) 1480
名古屋狂言共同社
印刷所
日東印刷工業株式会社 電(481)7445

狂言人語

かなり以前になりますが「狂言ブーム」と呼ばれた時がありました。能の添え物、さしみのつま程度にしか考えられていなかった狂言が、戦後歴史家を中心として新しい視点からの意義づけが試みられ、それに触発された様に狂言界自身の自覚的な活動が活発に行われ、この「ブーム」と呼ばれる現象が生み出されたと云えましょう。今日この現象をふり返って見ると、この現象は一時的なものであったとは決して云えないもので、その高揚したブームの状態がそのまゝ持続していると云えましょう。それは「ブーム」が定着したことであり、もはや「ブーム」ではなくなったものです。狂言自身が本来それだけの力を持っていたからでありこれまでおかれていた位置が不当であったに過ぎないのです。

この「ブーム」の最中に相次いで生まれた狂言会が「朝日狂言会」「和泉会」「やるまい会」といずれも今日まで着実な足取りを示しています。この内で去る十月十八日、「やるまい会別会」として「野村又三郎舞台生活五十年記念狂言会」が開催されました。大蔵、和泉両宗家を初め、人間国宝野村万蔵師、両流長老茂山千作、三宅藤九郎両師等、全国から狂言師を集めて近来にない豪華な催しとなったものです入場料の方も狂言会としては当然高いものとなり、さらに日程的には土曜日の午后、おまけに当日はあいにくの雨天となって入場者の出足が心配されたものですが、いざふたをあけると、なんと補助椅子まで満席となる程の盛況となったものです。既に入場券の前売状況から充分予測されたことですが、能の盛会にも見られない程の盛会振りに、傘棚が遂に能楽堂始って以来初めて不足し、直接名札をつけて預りながら受付係員が「やはり狂言にもこれだけの観に来る人があったのですね」ともらした言葉が印象的でした。

狂言会の例会では一定の観客が動員されるとはいうものの、格別めだった変化も感じられず、マンネリ気味の状況を打開する方向が模策されていたものですが、あらためてこれまでの狂言会の積み上げの大きさに感じ入りました。

やはり狂言会を十年余も積み上げたこと、その中で狂言の愛好者層は着実に拡がって来ていること、これらの愛好者のすべてが必ずしも毎回の狂言会に集るわけではないが、狂言をよく知っていること、番組により、演者により、必ず見るべきものは見に集ってくれるということ、今回の「やるまい会」での盛況はそれをうかがわせてくれるに充分でした。今後の狂言会の企画運営に大いに考えさせられました。

十一月の催能

十一月二日
能 清経 風韻会 守部啓子
能 二人静 厳島博子 厳島満里子 高田みね子 奥田薫 高安滋郎 西村欽也
能 舟弁慶 高安滋郎
狂 柿山伏 大野弘之 佐藤友彦 幸友会 井上礼之助 修囃子会
十一月三日
十一月八日
能 楊貴妃 沢田諷会 春子 高安滋郎 野村又三郎
十一月九日
能 野宮 観世会 観世寿夫 宝生閑 井上松次郎
能 国栖 大西信久 西村欽也 野村又三郎 佐藤秀雄 佐藤卯三郎 佐藤友彦 大野弘之
狂 鈍太郎 盛義後援会 梅若盛義 高安滋郎 野村又三郎 佐藤卯三郎
十一月十五日
能 舟弁慶 野村又三郎 井上礼之助
狂 呂蓮 邦謡会 やるまい会於栄能楽堂 衣斐の会 正宜 高安勝久 佐藤秀雄
十一月十六日
十一月十六日
能 小督 長田鶴高安滋郎 井上松次郎 佐藤卯三郎
十一月廿二日
能 六浦 野村又三郎 和泉狂言会 壷泉会 杉浦芳枝 輪島亢英 高安滋郎
狂 清水 井上礼之助 井上松次郎 鬼頭五朗追善能 内藤泰二 西村欽也
十一月廿三日
十一月廿四日
能 海士
狂 竹生島参 野村又三郎
十一月廿九日
能 石橋

狂言解説

柿山伏＝修業を無事終えて本国へ帰る途中の山伏。見事に熟れた柿を見つけると柿主に断りなしに木に登って柿を食べている所を見廻りの柿主に見つかってしまいます。犬や猿だと散々にからかわれ、挙句は鳶の真似をさせられて木から落っこちてしまいます……。

鈍太郎＝西国から三年ぶりに都へ戻った鈍太郎。妻の許へ戻ると近所の若い衆がなぶるものと妻はとりあいません仕方なく馴染みの女の所へ行ってもやはり同様です。世をはかなんだ鈍太郎は出家してしまいます。翌朝真の鈍太郎と知った二人の女が待ち受ける所へ出家姿の鈍太郎が通りかかります。

呂蓮＝諸国修業の旅の出家に一夜の宿を貸した男、日頃から出家の望みを持っていた男は無理矢理弟子にしてくれる様頼みこみ、呂蓮坊という名をもらって頭をきれいに剃ってしまいました そこへ男の妻が現れ、坊主頭を見てびっくり仰天、元の様に毛をはやせと二人に迫ります……。

清水＝主人に野中の清水へ行って水を汲んで来る様云つけられた冠者。行きたくないため桶をかくして、清水に鬼が出たと逃げ帰りました。半信半疑の主人が清水へ様子を見に行くと、鬼に化けた太郎冠者がとび出し、震え上った主人に日頃の不満をぶつけます。

竹生嶋参＝主人に無断で竹生嶋参りをした太郎冠者。立腹した主人の機嫌を直そうとひとから聞いた秀句をいいかかってくちなわ(へび)の秀句でハタとつまってしまいます……。

狂言団子

野村広二

今年も芸術・芸能の秋は多彩な催しが華麗な花を咲かせて、しづかに幕を閉じようとしている。先き頃芸能にくわしいK・Y氏から能・狂言のことで電話をいただいたが、こちらも最近の話題を伝えようとして、つい話しそびれてしまったことがある。ここにその三・四のことをしるすと、それは梅若六郎氏の関寺小町、狂言では三宅藤九郎氏の新作狂言集出版記念会に続き、北陸狂言会の発足、大蔵流若手の釣狐東西上演、十一月東京顔見世歌舞伎公演の「伝授山姥」（武智鉄二構成・川口秀子振付、歌右ヱ門・梅幸、地謡・桜間金太郎社中）紀州道成寺（吾妻徳穂に住僧宝生閑・能力野村万之介）無形民俗文化財指定に春日若宮おん祭の芸能（四天王寺聖霊会の舞楽ほかも）などのことである。幅の広さが楽しい想像を駈けめぐらせる。この秋は右ひざを痛めて杖に頼り、雨の日曜日は能楽堂に行けず、残念であったが、よく晴れた小春日和の十一月中旬、徳川美術館の源氏物語絵巻展にでかけた。竹河の一枚が事新しくきわめてあざやかな色をみせて目に迫り、鈴虫で笛を吹く貴公子の姿がいつみてもゆかしい。元館員の狂言好きだった故桜井清香氏の模写がその四種類のうちに飾られてなつかしく、住吉派の模写の説明文に「能絵鑑」（中村保雄監修）の住吉如慶の名をみつけてうれしかった。植込みにつわぶきの花の黄がきれいであった。それと、十月日本名陶展（朝日、愛知県美術館）の茶器に銘・俊寛（長次郎黒楽）武悪（瀬戸黒）の茶碗があって、見学の行列にしばらく逆らうような工合でつくづくと眺めていた。

十・十一月の能では山田仁三郎追善能。名古屋金剛流の長老であった故人に対し、地元の活躍と雪（豊島弥左ヱ門）融（金剛厳）の佳さが相交わって優美な、将来を約束するよき手向けとなった。狂言、十月の野村又三郎舞台五十年記念狂言会が盛会であったことを特筆したい。善竹・山本両家を別として、大蔵・和泉二流の家元をはじめ錚々（そうそう）たる狂言師の顔触れを揃えて、五つの狂言・三長老による三つの小舞・一つの語り（ほかに一調一管とワキの語り）が狂言の大きな世界を展開して楽しかった。五十年の、幾つかに区切られ、今日の又三郎を示すその狂言芸の年輪は思い出の深い感傷を誘おうが、これからいや増す同氏の芸の深さと風格に大きな期待を寄せたい。当日同氏は花子・替え型を演ずる。ち密で、やわらかく、思慕の流れを崩さなかった格調の同曲は、万之亟万作両氏の共演のもと、又三郎近来の傑作といえよう。前半の装束は烏帽子狩衣・指貫に太刀を佩く姿であった。ほかに無布施経（松・秀、山田仁三郎追善能）おもしろし。

放送は葵上（豊島弥左ヱ門、NHK以下おなじみ）狂言と一調（因幡堂山本東次郎・金岡和泉保之、一調山姥柿本豊次・近藤乾三）をみる。本は書評小林責・狂言史研究（小山弘志、文学十月、岩波書店）井上菊次郎のこと（小林責、〈近代の狂言師たち〉のうち能楽タイムズ七―十一月、五回）ほか

十二月の予告

十二月 七日 義捐金募集能

能 咸陽宮 河村鉦二 西村欽也
間 井上礼之助

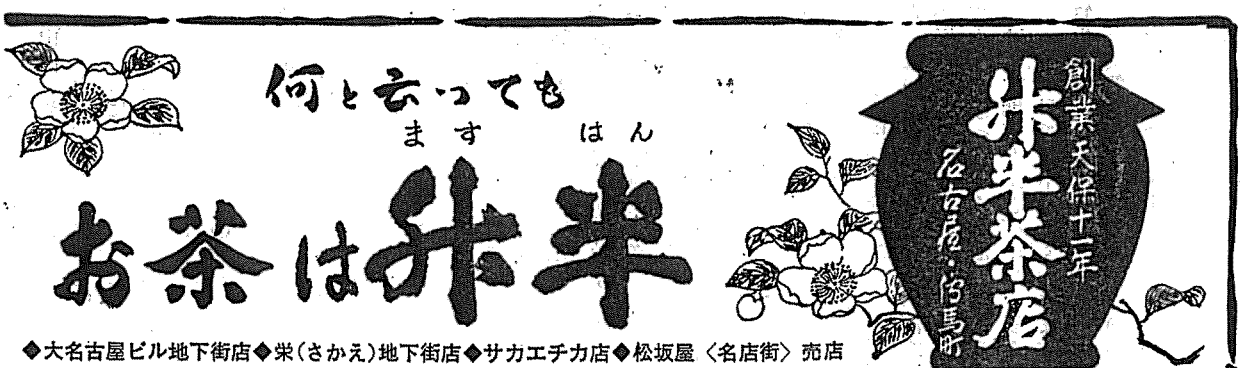
能 班女 佐藤太俊 高安滋郎
間 佐藤卯三郎 井上松次郎

能 舟弁慶 戸田和玉井博祐 高安滋郎
間 野村又三郎

十二月廿一日 青少年のための芸術劇場

第一部 中学生の部 午前十時

能 梟山伏 野村又三郎 佐藤秀雄 井上礼之助
能 舟弁慶 小島一英 久田徹二 高安滋郎
間 井上松次郎

第二部 高校生の部 午后二時

狂 佐渡狐 井上松次郎 井上礼之助 佐藤卯三郎
狂 舟弁慶 梅田邦久 武田弘 高安勝久
間 大野弘之